のんびり

14 non-biri

2015 Autumn

ユタカな国へ
あきたびじょん
ARITAVISION
TAKE FREE

秋田にはうまい飯とうまい酒があります。
その豊かさが
秋田の実直なものづくりを支えてきました。
そして同時に、秋田の人々のなかには
大らかで力強い
「のんびり」精神が育まれました。

そんなのんびり秋田は
右肩上がりな経済成長という
ゴールなきゴールに向かい
懸命に走ってきたニッポンにとって
まるでビリを走るランナーのように
映っていたかもしれません。

けれど世の中は変わりました。
順位など気にせずのんびり歩いてきたことが
まさに「ノンびり」となる時代がやってきました。
日本人の多くは今、
うまい飯が食べられてうまい酒が飲めるという
当たり前の豊かさについて考え直しています。
しかし秋田では昔も今も、ずっと
それが人々の暮らしの真ん中にありました。

ビリだ一番だ。上だ下だ。と
相対的な価値にまどわされることなく
自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う。
そんなニッポンのあたらしい〝ふつう〟を
秋田から提案してみようと思います。

のんびり編集部

のんびりしたいは
みんなのきもち
のんびりできるは
ゆたかなあかし
のんびりまっすぐ
秋田のくらし

表紙の撮影場所

秋田公立美術大学アトリエもも さだ

みんなで農民美術！

今号の『のんびり』は木版画家「勝平得之（かつひら とくし）」と、彼の考え方の指針となった「農民美術運動」（詳しくは特集記事をご覧下さい）についての特集です。今回は、そんな特集になぞらえて、農家の方々に美術作品を作ってもらいます。作品づくりのモチーフになったのは、勝平の風俗人形「ぼっち」。実際の勝平の人形は高さ25センチほどのかわいらしいものですが、ここでは180センチ近くある巨大レプリカ像が登場！この表紙撮影のために今号も秋田公立美術大生が作ってくれました。

この人形をモデルに、クレヨン画、紙粘土、ちぎり絵、こけしの絵付け、木版画、写真、俳句など、思い思いに制作。普段は農業に汗を流すみなさんも、この日は芸術家さながら、真剣にモチーフに向き合います。そうして出来上がった作品がこちら！力作の数々に編集部一同大感激！

この表紙撮影の様子は「のんびり公式ウェブサイト」でもご覧いただけます！

『のんびり』表紙写真ができるまで。写真家浅田政志と奮闘したその過程を公開中！ http://non-biri.net

秋田で暮らす美しき人々
＝あきたびじん

今号の「あきたびじん」ぶつ相関図

上田市立美術館 学芸員
小笠原 正さん

勝平得之のご長男
勝平新一さん

木版画家
勝平得之さん

秋田県立近代美術館 元副館長
小笠原 光さん

のんびり編集チーム

県外メンバー

藤本智士

浅田政志

鍵岡龍門

山口はるか

服部和恵

矢吹史子

田宮慎

秋田メンバー

船橋陽馬

澁谷和之

今井春佳

14 non-biri
2015 Autumn issue
contents

1 のんびりまっすぐ秋田のくらし

4 **秋田の木版画家、勝平得之が得たもの**

6 第1章 **農民美術ってなんだ？**

16 第2章 **受け継がれる農民美術、そして秋田へ**

24 第3章 **知られざる勝平得之**

30 第4章 **のんびり美術運動**

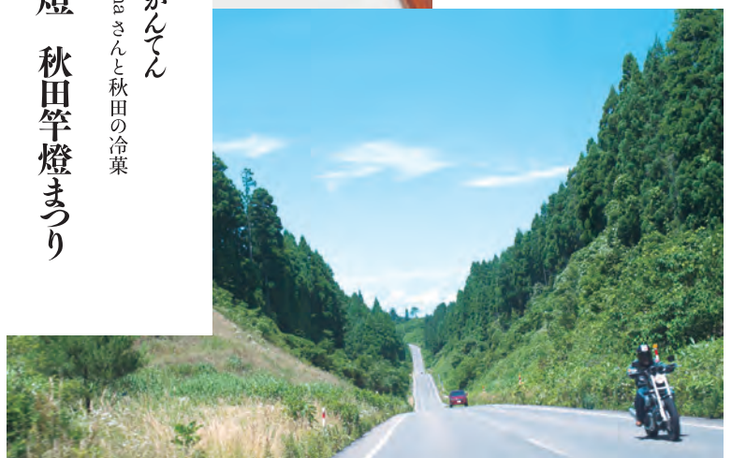
38 第5章 **勝平得之が得たもの**

46 **ちょうどいいかんてん**
第2回／Gomaさんと秋田の冷菓

51 **秋田の燈　秋田竿燈まつり**

57 **下戸式秋たんぼう　福田利之**
第14回／ニュルニュルシコシコ大人の悩み流します

62 **non-biri akita access map**



秋田の木版画家、勝平得之が得たもの

取材・文＝藤本智士 Satoshi Fujimoto
写真＝浅田政志 Masashi Asada
鍵岡龍門 Ryumon Kagioka
船橋陽馬 Yoma Funabashi

本誌の特集をきっかけに作品集が出版され、没後10年が経ったいまようやく注目されつつある木版画家、池田修三。けれど秋田に住む人たちにとっては、池田修三さん以上に有名な木版画家がいます。その人の名は勝平得之（かつひらとくし）。この独特の読みは、本名の勝平徳治（かつひらとくじ）からくるもので、多色摺り木版の技法を独学で身につけた勝平が「之（これ）を得（え）たり」と、以降、名乗るようにした雅号だと言います。独特の人物描写が特徴的な勝平の作品は、故郷秋田の民衆風俗を色鮮やかに表現し、古き良き日本の風景や習俗を、現代に生き生きと伝えてくれます。

そんな勝平の作品原画を初めて見たのは4年前に訪れた勝平得之記念館（秋田市）。しかしそこでまっすぐ僕の目に飛び込んできたのは、勝平の木版画ではなく木彫人形でした。木版画に描かれた人物がそのまま飛び出してきたようなそれらの人形は「秋田風俗人形」と呼ばれており、勝平が版画家として大成する以前に、生計を立てるべく制作していたお土産品とのこと。確かに渾身の作品というよりは、適度にチカラの抜けた人形たちは「商品」としての趣を持ちつつも、その技術の高さは隠しようがなく、僕の目にはどんな仏像よりも神々しく映ったのを覚えています。「すごい！」「素敵！」「欲しい！」を連呼するほど大興奮してしまった僕は、その足でまっすぐホテルに戻り、勝平得之の秋田風俗人形について検索。そこで知ったのが、「農民美術」という考え方でした。

この農民美術なる聞き慣れない言葉を真ん中に、勝平得之を探ってみることから、地方で暮らすということについて考えてみようというのが今回の特集です。実は、冒頭に記した勝平得之という雅号の由来が、僕にはどうもしっくりきません。生涯秋田を離れることのなかった勝平得之という人間が得た「之」とは、本当は何だったのか？　今号も、のんびりゆったりお付き合いください。

のんびり編集長　藤本智士（Re:S）

■ 資料提供
勝平新一、秋田市立赤れんが郷土館、小笠原光、上田市立美術館、ほか

■ 勝平得之作品、秋田風俗人形（一部を除く）
秋田市立赤れんが郷土館所蔵

第1章

農民美術ってなんだ？

7月5日

朝9時半。いつものように関東や関西など、方方からやってくるのんびりチームが集合場所の駅に到着。しかしいつもと違うのは、ここが秋田ではなく、長野県だということでした。そのことについて、まずは少し説明せねばなりません。僕が数年前に一目惚れした勝平得之の秋田風俗人形。それは、勝平が木版画家として成功する以前に、生計を立てていたお土産品で、その背景に農民美術なる考え方があったというのは冒頭に記したとおりですが、この農民美術を提唱した人物が、長野県上田市に縁の深い山本鼎（かなえ）という版画家でした。ということで僕たちは今回、勝平得之をより深く知るためにも、まずこの農民美術について理解しなければと、取材のスタートを長野に決めたのです。

山本鼎？

木版工房で9年間修業を積み、一時は印刷のための版画職人を目指していた山本鼎ですが、芸術の道を歩むべく、美術学校で西洋画を学び、さらに約4年間のフランス留学へ。ロシアを経由した後日本に戻るのですが、そこで鼎は、帰国後の自身に、いや、日本の美術界に、大きな転換をもたらす出会いをします。帰国の旅費を得るために6ヵ月ほど滞在していたモスクワで、偶然立ち寄った農村工芸品の展示館。そこに飾られた農民が作ったという家具や人形の素朴な美しさに鼎は感動します。当時のロシアは、圧倒的な農業国であったにもかかわらず、冬は厳しい寒さのために耕作ができず苦しんでいました。そこで農家の人たちの多くが手工業を副業として収入を得ており、役場で無料の教室を実施するなど、さまざまな試みが行われていたのでした。「これは地元信州でも有効なはず」そう思った鼎が帰国後に提唱したのが農民美術でした。

早速、長野県神川村（かんがわむら）（現上田市）で、農家の人々を対象にした冬の副業としての工芸品制作講習会を開いた鼎は、「農民美術運動」として、さらにそれを日本各地へと広げていきます。各土地の風土を活かした特色のある工芸品を制作し、根付かせることを目的とした「農民美術講習会」は、秋田でも行われ、彫刻家の木村五郎を講師に開かれたその講習会に参加した人物こそが、そう、勝平得之でした。

自由画教育運動と創作版画

その他にも鼎は、同じくモスクワで見た児童画の展覧会で、ロシアの子どもたちが自由にのびのびと絵を描いていることに衝撃を受けます。お手本をただ模写させるだけの旧来の美術教育ではなく、日本の子どもたちにも自由な感性で絵を描かせてあげねばと、自由画教育を提唱。つまりは僕たちがいま受けている独創性を重んじる美術教育のはじまりは、山本鼎が作ったものだったのです。さらに、絵師、彫師、摺師、それぞれが分業制で制作する、それまでの錦絵（浮世絵版画）ではなく、それらの工程をすべて1人で行う「創作版画」という世界を確立し、今日の版画がそうであるように、日本画や西洋画同様、美術の一ジャンルにまで高めたのも山本鼎でした。いわずもがな、そのことが後の勝平得之や池田修三などの創作版画家の活躍へと繋がっていくわけですから、この偉大なる功績については、もっと多くの人が知るべきだと思うのですが、今回はあくまでも勝平得之特集。山本鼎に関する記述はこれくらいにして、さあ再び、上田駅に集合したのんびりチームへと話を戻しましょう。

上田市立美術館

小笠原正さん（43）

上田駅へと集合した僕たちが最初に向かったのは、上田市立美術館。こちらの学芸員である小笠原正さんに、山本鼎と農民美術についてお話を伺う約束をいただいているのでした。

矢吹　すみません大勢で。

小笠原さん（以下敬称略）　どうぞ、なるべく固んでいただいて。椅子は余ってますんでどうぞ。

一同　ありがとうございます。

藤本　実は3年前に山本鼎記念館に伺ったことがありまして、あちらはもう閉館してしまったんですよね？

小笠原　そうです。私、向こうにいたんですけども、去年の10月にここが開館することになったので、それでこっちに。ご存じだと思うんですが、山本鼎がはじめた農民美術運動と児童自由画運動。それらの考え方を引き継いでいくっていうのが、この美術館ができた理由、設立の理念なんです。

藤本　なるほど。

小笠原　だから、山本鼎記念館が閉まって、寂しいな、と思うかたもいるかもしれないけど、決してそんなことはなくて、こういう大きな美術館になって、彼の思いをこれからもっと進化させていこうと。

藤本　すごく安心しました。やっぱり、山本鼎の存在感が地元のなかでもどんどん薄れてしまっている表われなのかな、とちょっと思ってしまっていたので。

小笠原　そうですよね。

藤本　いや、でも本当に安心しました。で、早速なんですけど、少し疑問に思っているのが、農民美術の作家さんっていうのは、いまもたくさん上田にいらっしゃるわけですよね？

小笠原　はい。

藤本　かつてはまさに農家のかたの副業だったと思うんですけど、いま、その継がれているかたっていうのは、これが本業になってるってことですか？

小笠原　そうですね。やっぱり、時代背景が左右するんですよね。いまは、専業農家でこういう物を作って足しにするなんて時代じゃなくて、田んぼが駄目だったら、昼間学校の先生やって、土日だけ田んぼやればいいとか、いろいろあるじゃないですか。だから、いまやってらっしゃるかたは物を作って売りつつ、カルチャースクールとかで講師をやって、月謝をもらってるんですね。

藤本　なるほど。

小笠原　昔は貧しさゆえにお金の足しにしようと思ってたのが、いまはどっちかっていうと、趣味の世界の、講師の役割なんかも大事な部分になってるようなんです。

藤本　となると、余計に疑問なんですけど、農民美術っていうものの定義っていうのは一体何なんでしょう？

小笠原　いま、上田に長野県農民美術連合会っていうのがあって、十数人のかたがいるんですね。そのかたたちも困っているみたいです。農民美術って定義すると何だろうかと。

藤本　そうですよね。

小笠原　山本鼎が一番最初に言っているのは「農民の手によって作られた木工芸品などである」ということなんですね。なので、例えば、どこどこの何とか彫りっていえば、こういう形だというスタンダードな意匠っていうか、そういうのが、農民美術は何もないんですよね。農家の人たちの手によって作られた、木工芸品、他にはクッションとかテーブルクロスとかそういう物もあったんですけども。決まったスタイルがないわけです。なぜ決まったスタイルがないのかというと、山本鼎がこう言っているわけです。「自分で直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならない」と。

藤本　なるほど。

小笠原　自分の感じた感覚で物を作ってくださいと。与えられた図案のとおりに作るんじゃなくて、自分で物を見て、考えて、図案なりデザインを考えて、そしてこういう物を作ってください。っていうのが彼のモットーだったので、決まったスタイルがないんですよ。なので私は農民美術というのは、特定のカタチではなくて、自分のオリジナリティ、自分のなかの表現したいものをカタチにしていくための考え方なんじゃないかと。

藤本　そうですよね。いま、お話を聞いてて思ったのは、みなさん奇しくもカルチャースクールをやってらっしゃるということで、ならばそこにおられる生徒さんって、いわばかつての農民なんじゃないかと。

小笠原　なるほどね。そういうところもあるかもしれないですね。

藤本　それこそ当時講師として派遣されていた木村五郎さんのような役割を、いまの講師のかたたちがやってらっしゃるような気がしました。なんか妙に農民美術の作家さんっていう存在になって、伝統工芸士のようになっちゃうのは、どこかちょっと違和感があって。

小笠原　そうなんですよ。最初は、農閑期に片手間でも作られれば、それで十分だったんです。でも時代が変わって、鼎自身、将来的にこういうのを専門的にやる人が出てくるところまで農民美術を発展させようって、戦前から考えていたことはいたんですけども。

藤本　そうかー。

小笠原　実は今回、勝平さんの特集ってことだったので何かないかなあと思ったら。

藤本　あっ、魁（秋田のメジャーな新聞。秋田魁新報）の当時の記事だ。

小笠原　昭和3年の夏にやってる大湯（現鹿角市）の講習会。そのときに勝平さんが書いた記事です。

魁新報

第一萬三千五百二

（可讀衛生部補三號）

農民美術

（大湯人形について）

勝平得之

それは大湯人形の一個がしをなしくかぶり変形分に…

矢吹　農民美術、って書いてありますよ。

藤本　もう冒頭から「山本鼎先生が～」って書いてある。まず農民美術の説明から入ってるもんね。

小笠原　ちょっと読んでみますか？

一同　お願いします。

小笠原　では、読んでみますね。「山本鼎先生が大正8年、長野県神川の一村落に、農民美術の種を植え付けて以来、全国の農村都市にも普及し、各地方の農民美術生産組合からは、木工、木彫、版画、風俗面、地方土産として

郷土色に富んだいろいろな美術作品が、華やかな実となって社会に提供された。農民美術は農村都市に副業的な産業、工芸の新領土を開拓する使命のもとに生まれた。農民美術生産組合はその使命のもと、農閑期を利用して、趣味と利得を得つつ、美を愛する農村都市の人々によって成る。農民美術！　それは郷土から生まれるところの土臭い美術である」……って勝平は思ってる。

一同　うんうん。

小笠原　「去る8月、大湯の人々によって農民美術の講習会が開催せられた。日本農民美術研究所から講師として、日本美術院同人、木村五郎氏が派遣され、風俗人形のサンプル制作に取り掛かられた」と。「冬期風俗は、毛布人形、ぼっち人形」……って言うんですね。

一同　ぼっち人形。

小笠原　「夏期風俗、こも人形、牛方人形、この4種を作りました。冬、雪、しかも吹雪の中を、赤、薄青、ねずみ色等の上着を着て無言に歩む。もっぺ」……もんぺですかね。「藁靴、それも雪国だけが持つところの情緒。それは雪国風俗の一つである。宿の女中さんが、8月の焼きつく暑さにもかかわらず、毛布を被ってモデルとなった。それが我々の毛布人形となって生まれた」

一同　へぇー。

小笠原　「雪を喜ぶのは、犬。そして子犬のように嬉々として遊ぶ子ども、村の童、村童である。被るものは真っ赤なぼっち。わらの長靴。それは雪国、秋田風俗の一つである。真っ赤なぼっちは秋田から来た、70有余齢のばあさんの手によって成り、これを勇敢な少女が被ってモデルとなった。それが我々のぼっち人形となって生まれた」。すみません。まだこれで半分ぐらいなんですが。

矢吹　大丈夫です。

藤本　お願いします。

小笠原　「夏期、夏は青田の草取りにせわしい農婦、真っ赤、橙のきれを被る。それは若さによって被るきれの色を異にする。暑さをふせぐゴザを身に着けた農婦姿、それは鹿角大湯の青田にのみ、散見する。それは大湯風俗の一つである。一会員がしおらしく、真っ赤なきれを被り、ゴザを身に着け、メイクアップよろしくの農婦になりすましてモデルとなった。それが我々のこも人形となって生まれた。99曲りあるという、まだるっこい十和田沿道に詩趣をそえるのはこれ。一つの鞭を手にして、数十頭の牛を左右する牛追いの姿、それは神秘境、十和田の持つ使者である。木村五郎先生は十和田遊覧の際、この牛方を見て、『これはいいモチーフだ』と私を顧みて言われた。明くる日、私は青い前垂れをかけて、モデルとなった。臭気ふんふん、鼻をうつは何！　人間の臭気？　獣の臭気？　さては彼らの汗の臭気か、私はこの臭気に苦笑しながら彼らの生活を思った。それは我々の牛方人形となって生まれた。我々はノミ、小刀を持って、一辺のほうざい」……朴（ほお）の木ですね。「朴材を懸命に彫り進めた。色々な困難を越えて、作るもののみが得る愉楽を知った。朴材一寸五分角、高さ三寸五分の小品ではあるが、我々の魂が吹き込まれた作品は、サンプルは木村五郎先生、彫刻は各生産組合員、そしてできた作品は木彫風俗人形である。一個の型から作る処の泥人形とは違って、木彫り人形は一個一個彫る故に同一作者が同一風俗人形を10個作っても、一個一個、顔の感じが違い、肉付けが異なっている。木彫り、それは東洋的な風味を持つ風俗人形。それは地方土産として郷土色を多分に持たなければならない」……という勝平先生の記事、なんです。

藤本　あ〜、ありがとうございます。いやすごいなー。でも謎だ。どうして勝平さんが寄稿できたんだろう？

小笠原　ただふつうに申し込んだ人であれば、記事を書いてくれなんて言われないと思います。

藤本　そうですよねー。

小笠原　ちなみにここにあるのが、見本の人形。どれだったかな、裏にサンプルって書いてあるんですよね。これかな、うん、これだ。

藤本　本当だ。

小笠原　基本のサンプルを作って講習会に行って、「さぁ諸君。こういう感じだから」と、やり方を教えるわけです。

藤本　さっきの新聞記事からすると、その土地の風俗に合わせて、題材やモチーフを考えたりとか。勝平が記事に書いてたとおりかなって思うんですけど。すごく土着的な表現というか、俺たちにも芸術はやれるんだ！　っていう喜びが伝わります。

小笠原　そうですね。

藤本　そのへんが勝平得之にとって、山本鼎さんの考え方におそらくすごく惹かれたところで、かつ、木村五郎さんっていうかたのお人柄もすごく良かったようですし。

小笠原　鼎は芸術家を養成しようなんて、はなから考えてないんですよ。芸術家としてやっていきたいという人がいれば、それは応援するんですけど。農家やその子どもたちに教えたっていうのは、芸術的なものを生み出す態度や感性が生まれれば、それでオッケーだって思ったからなんです。だから、全国で講習会をやって、作り出す喜びを伝えたかったんじゃないかと。木村五郎にしたって、それを粋に感じて、講師を買って出たんでしょうし、そこに来た人がどこまで理解していたかは

わかりませんが、少なくとも勝平さんに関しては、よく理解していたんじゃないですかね。

藤本　あと、山本鼎と勝平得之って考えたときに、決定的に違うことが、勝平はずっと秋田にいたってことなんです。

小笠原　はい、はい。

藤本　東京に出稼ぎに行ったときに見る世界くらいはあるんだけれども、基本的には地元で表現することをずっとやりとおした人で、それは、地元でやってていいんだよっていうことを、海外でいろんな文化を見てきた山本鼎が言ってくれてるんだってことが、たぶん勝平にとって後ろ盾になったんじゃないかなって思うんです。

小笠原　うん。鼎自身はヨーロッパなんかに行って、何を見たかっていうと、鼎が行く半世紀くらい前にあったジャポニズムというか、意外と東洋趣味っていうのがまだ残っていて、それを見ながらも、セザンヌとかルノアールとかを散々見て思ったのは、やっぱり日本の良さだった。海外に行ったからこそ彼はよくわかっていて、だからこそ、秋田からどこかへ出るんじゃなくて、秋田から周りを見つめる、十分それであなた自身の目も育つだろうし、そこからこそオリジナリティが出てくるだろうっていうふうに、思っていたはずです。

藤本　そうですよね～。ちなみに山本鼎さんと勝平は会ってないんでしょうか？

小笠原　具体的な証拠のようなものは残ってないですね。

藤本　年譜を見ていると、昭和3年に木村五郎さんの講習に参加して、その年に雅号を得之に変えてるんですね。そして昭和4年には日本創作版画協会展で初入選するんですけど、そういう賞を選ぶのは山本鼎さんだったんですか？

小笠原　そうです。で、たぶん賞をあげるときには当然受賞式とか、いまでいうレセプションみたいなものもあったでしょうから、私は東京で会っているはずだと思っているんですよ。

藤本　そうですよね。

小笠原　だから、農民美術の方面よりも、やっぱり版画の方の東京会場とかで顔を合わせているんじゃないかなと。その方が、無理がないとうか自然にそういう機会があるんじゃないかなと思うんですよね。で、年が20歳くらい違うので、「ああ、勝平くん、秋田からよく来たね」って、「こういうスタイルで頑張ってみたまえ」って、何か飲みの席ででも顔合わせているはずなんじゃないかなと。

矢吹　ふふふ。

藤本　ね～。

小笠原　秋田から世界を見ればいいんだと。東京に来る必要なんか全然ないんだよ。ということを、私は話していたと思いますよ。

藤本　うん。だろうなぁ。やばいなぁもう。たまらないね。楽しすぎる。

一同　（笑）。

小笠原　浮世絵版画ってありますよね。葛飾北斎とかの。だけど北斎とかは絵を描く絵師なので、彫ることも摺ることもやらないわけですよね。彫り師とか摺り師は無名の職人がほかにいっぱいいるわけです。でも、鼎はその考え方を変えるんですね。まず最初、自分で絵を描いて、それを版木に描き写して、彫るのも自分でやる。さらに摺るのも自分でやって、色の具合も自分でコントロールする。そこまで全部やるんですね。だからいま、私たちはふつうに版画っていうと印刷じゃなくて、芸術だって思うじゃないですか。でも当時はそうじゃなかった。版画って言葉をばらすと、「版」の「絵画」っていうふうに、「版画」っていうのはそういう意味なんですね。つまり彼は何を言いたかったかっていうと、版画であっても最初から最後まで全部、自分で責任を持って作るということが、芸術に繋がるんだと。キャンバスに線を描くのはあなたで、青く塗るのはもう1人の人で、最後ニスを塗るのは別の人です。そんな油絵の描き方はしないですよね。それと同じように、彼は版画も、農民美術も、全部自分の手で、自分の責任で最初から最後までやるってことが、自分の持っている感覚を表現していく上で、とても大事なんですよと。そのことを生涯をかけて伝えたんだと思うんですよね。

藤本　なるほど～。すごくよく理解できました！　ありがとうございました！

一同　ありがとうございました！

勝平得之 年譜

HISTORY OF TOKUSHI KATSUHIRA

＊勝平新一 2001「勝平得之作品集 版画「秋田の四季」」（秋田文化出版）より引用

絵・石川飴子

明治三七年
（1904）
四月六日、秋田市鉄砲町四五番地（現・大町六丁目六番一九号）に父為吉、母スエの長男として生まれる。本名は徳治。家業は紙漉だったが、機械製紙の発達により、為吉の代から左官職が主となった。

大正五年
（1916）
一二歳
五月、母スエ病死。母の死による寂しさを絵を描くことで慰める。このころから父の紙漉・左官を手伝う。

大正一〇年
（1921）
一七歳
家業の暇な冬期、東京・大阪方面に出稼ぎし、ビルの建設作業に二、三年従事。その間、そのころ流行の竹久夢二などの絵に魅せられ盛んに模写する。

大正一三年
（1924）
二〇歳
後に版画になった身近な風景を水彩画で描く。この年の終わりころ、墨摺りの木版画を試みる。版木はゲタ屋から朴の板を求め、傘の骨をといだ丸ノミで習作する。

大正一五年
（1926）
二二歳
〝勝平庵石佛（しょうへいあんせきぶつ）〟の銘でペン画の「七夕スケッチ」、抽象的な墨摺版画「怒気」「現夢」などを秋田魁新報へ寄稿、昭和二年頃まで掲載。

昭和三年
（1928）
二四歳
農民美術の講師として来県した木彫家木村五郎の指導を受け、木彫の風俗人形や秋田犬を製作して販売、以後十余年間木彫を生計の一助にし、独学で版画の制作に没頭し、自画・自刻・自摺の彩色版画を完成し、雅号を得之と定める。

昭和四年
（1929）
二五歳
（秋田十二景）の制作に着手。日本創作版画協会展に「外濠夜景」「八橋（やばせ）街道」が初入選。その版画の売約代金で初めて版画用具を整える。

昭和五年
（1930）
二六歳
七月、久米晴と結婚。卓上社版画展、国際美術会展に入選。商工省主催全国工芸展に木彫「秋田風俗人形」七点が入選。これを契機に以後家業からはなれて、木彫と版画の制作に専念する。

昭和六年
（1931）
二七歳
帝展に「雪国の市場」が入選。官展入選は以後の画業に大きな励みとなる。ほかに国画会展、日本版画協会展、新興版画展、白日会展、水彩画会展に入選。

昭和七年
（1932）
二八歳
帝展に「雪の街」が入選。この作品によって版画家として認められ、日本版画協会の会員に推薦される。

昭和一〇年
（1935）
三一歳
光風会展に「草市」「五月の街」が入選。
（秋田風俗十態）の制作に着手。
夏に来県したドイツの建築家、ブルーノ・タウトが、宿で偶然目にした版画が縁で、秋田市内外の代表的な民家を案内する。

昭和一一年
（1936）
三二歳
文展鑑査展に「橇（そり）」が入選。
欧米各都市で開催の日本現代版画展に「雪の街」「収穫」「草市」「五月の街」など九点を出品。英文『日本の家屋と生活』（三省堂）の著者ブルーノ・タウトの要望で、その口絵に色摺（おおまがり）版画千枚を制作。冬に再び訪れたブルーノ・タウトを大曲、横手などに案内する。（岩波文庫『日本美の再発見』参照）

昭和一四年
（1939）
三五歳
戦争始まる。

昭和一六年
（1941）
三七歳
東京銀座、松坂屋で個展を開き、代表作三十数点を展示。東宝文化映画「土に生きる」のタイトル画を制作する。

昭和一七年
（1942）
三八歳
秋田魁新報の連載小説『椽（とち）ノ木の話』（富木友治著）の、挿絵版画五七図を制作。
山形県鶴岡市に四か月間滞在し、三山雅集など古版木の墨摺り、三万枚の復元を体験。光風会展に「竹打」が入選。

昭和二〇年
（1945）
四一歳
終戦。

昭和二七年
（1952）
四八歳
サンフランシスコのパレス美術館ほか太平洋沿岸都市で開催の現代日本美術展（サロン・ド・プランタン主催）に、「鳥舞・駒舞」が招待出品。
ドイツのケルン博物館での勝平得之展に（秋田風俗十題）の組物など六十余点を出品、保存される。

昭和二九年
（1954）
五〇歳
米国オレゴン州チラムーク公立図書館での勝平得之展に（大日霊貴神（おおひるめむちのかみ）社祭礼舞楽図）（八部作）ほか二十五点を出品、保存される。

昭和三三年
（1958）
五四歳
父為吉、八六歳で永眠。自らも胃病となり、加療につとめるが以来健康すぐれず、関係美術団体から身を引き、以後は小品を制作する。

昭和三五年
（1960）
五六歳
版画の新団体、日版会創立展に画展最後の作「八郎潟冬の漁場」を出品。

昭和三八年
（1963）
五九歳
秋田県文化功労章を受章。

昭和四六年
（1971）
六七歳
五年前に手術した胃病が悪化し、一月四日死去する。

第2章 受け継がれる農民美術、そして秋田へ

偶然の出会い

学芸員の小笠原正さんに、美術館2階の常設展示室に案内いただき、山本鼎の功績についてさらに年代を追って解説いただいたり、上田に残るさまざまな農民美術の工芸品を見せていただいたり、さらには『山本鼎物語』という児童向けの本を書かれた神田愛子さんにお越しいただいてお話を伺うなど、さらに知識を深めた僕たちはいよいよ美術館を出発します。

実は個人的に何度も訪れるほど上田の町が大好きな僕は、「中村屋」の馬肉うどんに喫茶店「木の実」のコーヒーと、のんびりメンバーをお勧めのお店に案内。さらに大好きな服屋さん「arkansas アーカンソー」を紹介しようと店に立ち寄ったときのことでした。「藤本さん！」という声がして振り返ると、なぜかそこに普段は東京で働いているはずの村上晴香ちゃんという友だちがいました。びっくりして聞いてみると、彼氏がいま上田に移住し、週末なので会いに来ているとのこと。ということで紹介してもらった西信好真（にしのぶよしまさ）さん。彼はいま、コワーキングスペースと呼ばれる、事務所や会議室、打ち合わせ場所などを共有しながら、それぞれ独立した仕事を行う共働スペースを作る仕事をしていて、そこがオープンすれば、地元上田のお母さんたちに、プログラミングやデザインなどを教えたりする予定とのこと。それってつまりは現代の農民美術？　と思った僕は、今回僕たちが上田にやってきた理由について伝えます。すると、2人はあるお店を教えてくれました。

受け継がれる農民美術

「BOOKS & CAFE NABO.」偶然出会った2人に案内してもらってやってきたのは、昨年の11月にオープンしたばかりという古書とカフェのお店でした。元々紙屋さんだったという古い商店をリノベーションした店内は、とてもオシャレで、さまざまな古書だけでなく、美味しそうなパンや、かわいらしい雑貨たちとともに、なんと上田の農民美術品を販売していました。2人が連れてきてくれたのはこのためでした。店長の池上幸恵さんを紹介してもらった僕たちは、こちらで扱っている農民美術品の仕入れ先でもある「アライ工芸」というお店を教えてもらいます。ということで今度はそちらへ。先ほどとは一転、長年農民美術を扱ってきた自負を感じる落ちついたお店です。東京の民芸店などでも見かける農民美術界のヒット商品、鳩のシュガーポットなど、さまざまな工芸品が並ぶなか、僕はなぜか入口の「信州農民美術」と書かれた看板にぶらさがる小さな木のお守りのようなものが気になります。聞いてみると、これは

「蘇民将来符」と呼ばれるもので、近くにある信濃国分寺で毎年1月7日、8日に授与されるお守りとのこと。どこか農民美術的なものを感じた僕は、そのまま信濃国分寺へと移動します。

蘇民将来符

いよいよ秋田に戻らなければいけない時間ながら、どうしても寄ってみたいと立ち寄った信濃国分寺はとても立派なお寺でした。まずはお参りをすませ、寺務所へと進むと、ありました、蘇民将来符。職員のかたに伺うと、本来はお正月の縁日のみの頒布ながら、こうやって訪れる人のために、高さ3寸のものだけ常備してお分けしていますとのこと。さらにこの蘇民将来符は、地元の人たちの農閑期の仕事として作られてきたものだと教えてくださいました。偶然出会った晴香ちゃんたちのおかげで、さまざまな形で残る上田の農民美術に触れることができた僕たちは、上田市で一泊したい気持ちをグッと堪えて秋田へと戻ります。車で約8時間、ようやく秋田市に着いた頃にはもうすっかり夜中でした。

7月6日

翌朝、勝平得之記念館に集合した僕たちは、あらためて勝平得之の作品を鑑賞。そして12時、勝平記念館の学芸員さんにお願いをして約束をとりつけていた、勝平得之さんの息子さん、勝平新一さんにお話を伺います。

藤本　実は僕たち、昨日は長野県の上田市にいたんです。

新一さん（以下敬称略）　山本鼎さんの。

藤本　勝平さんの風俗人形を最初にここ（記念館）で見て、ほんっとうに感動して。しかも、これがお土産で売られてたっていうことに驚いて、辿っていくと農民美術という考え方があると。

勝平新一さん（82）

新一　そうですね。私の親父は農民美術の影響を受けて、地元の美っていうものを教わったんですね。私の親父の原点は、農民美術で、結局最後まで。

藤本　最後まで農民美術をやり続けた人。

新一　抜けられながった（笑）。

一同　（笑）。

新一　棟方さん（※勝平得之と同世代の版画家、棟方志功）とかは国画会（昭和期における有力な美術団体）の版画家になって、そこでみんな切磋琢磨して飛び出せたわけですよね。だけどうちの親父はどうしても農民美術から抜け出せなくて、秋田っていう一つの狭い範囲から抜け出せなかったんです。ただ、若いうちはいろいろ模索してるんですよ。西洋絵画のようなものの洗礼を一回は受けてるんですよね。

藤本　そうですよね。以前、新一さんが編集された作品集を拝見したときに、雅号が得之になる前の青年時代の作品を見て驚いたんです。いわゆる勝平作品らしい、土着的な表現しか知らなかったので。でもそういう時代も経た上で、なぜ、地元の良さに気づいたのか？　地元に居て、地元の良さに気づくって、相当難しいことじゃないですか。

新一　それがね、必ずしも秋田のなかで、親父の版画が認められているかっていうと……。反発もされてるんですよ。

藤本　あぁ～、あまりにも地元のものをそのまま出しすぎて。

新一　そこらへんがね、なかなか……。ちなみにこれは谷内六郎さん（昭和31年から26年間『週刊新潮』の表紙絵を担当するなど、郷愁溢れる作品が有名な画家）が書いた文章なんですけど。

藤本　へぇ～。ほんとだ。「秋田で見た感動の画家、勝平得之のこと」。

新一　これがね、親父のことを一番的確に評価してるっていう感じがしてるんです。

藤本　へぇ～。ちょっと読んでみます。「大地に根ざした作品群。さてカマクラの帰途、まだ他界されて間もない秋田の版画家、勝平得之先生のお宅を訪ね、家の部屋という部屋にびっしりと並ぶ作品群を拝見しました。僕は旅行雑誌の口絵か絵葉書程度の勝平作品の知識しか持っていなかったので、その作品群を眼前にして驚嘆しました。全部の作品が秋田風物であり、東北風物であり、その誠実極まりないお仕事には一片の気取りも見せかけもなく、ひたすらに祈りのように、郷土の大地と、そこに生活する慎ましく確かな人々の暮らしを、深い深い祈りを持っているかのように、強烈な愛情を込めて描ききっており、これこそ大地に根をおろした人間性が非常に高度に昇華された技だと、僕は感嘆いたしました。」……すごい評価ですね！

新一　すごいですよね。本当に親父を。

藤本　言い得てというか。

新一　あとは、読売新聞の芥川喜好さんっていう記者のかたの記事ですね。これも親父をよく表現してくださっている。

藤本　「昭和6年、27歳で帝展に初入選した得之は、昭和10年代に秋田を訪

右「夕立」（昭和２年）
下「魚を追ふ」（昭和２年）
版画を始めて間もなく「勝平庵石佛」の号で秋田魁新報に投稿していた頃の作品。その後、試行錯誤の末、多色刷りを成功させた喜びから、「之を得た」という意味の「得之」を雅号とします。

れたブルーノ・タウトや藤田嗣治（つぐはる）に激賞され、秋田風俗版画の作家として知られるようになった。『囲炉裏』を含む『秋田風俗十題』は、その直後の数年間、彼の制作の最も精彩を放った時期に生まれている。『白の風俗』『林檎の収穫』『正月の繭玉飾り』その色彩は不思議な明るさに満ちている。画面には花が溢れ、祭りや農作業のざわめきがある。タウトの言った、卵形の顔と美しい鼻と強い顎を持った快い型の顔立ちの人々がそこに居る。創作版画の作家たちが、東京で群れをなしていた時代、勝平得之は秋田を一歩も出ることなく、1人だけの活動を続けた。長男の新一氏が言うように、自ずと限界もあったに違いない。彼の初期作品には、もっと直感的で多様な絵画思考の芽がさまざまに芽吹いていた。だが、そのことも含め勝平得之の生涯は紛れも無い一筋の光を放っている。他ならぬ自分自身の養成によって表現を獲得し、自らを励ましながら1人そこに立っていた。そういう形をした光を」……すごいなあ。

「外濠夜景」「八橋街道」（秋田十二景）（昭和4年）

日本創作版画協会展で初入選した2点。その後も数々の入選を果たしますが、自身も「これほど感慨深いものはなく、一生を支える大きい力となった」というほど大きな転機となりました。

新一　谷内さんと芥川さんのこの文章を見ますと、親父をよく表現しているような感じがしますね。

藤本　そうですね。この「他ならぬ自分自身の養成によって表現を獲得し自らを励ましながら1人そこに立っていた」っていう、こういう部分が、まさに僕たちが昨日上田で教わった、「自分が直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならない」っていう山本鼎さんの言葉と重なります。

新一　親父も、秋田の先輩画家に東京に出て来いとも言われたんだけども、どうしても家族の問題で秋田からは抜けられなかったんです。長男で。生活の心配がなければ行ったと思うんですが。でも私のおじいさんにも大反対されて。その当時の絵描きとか芸術家っていうのは、遊びや道楽ですからね。結局、親の左官業を手伝って。

藤本　なるほど。そんななかで、木村五郎さんの農民美術の講習会が大湯でありますよという、その情報を手に入れるって、すごいアンテナですよね。

新一　はっきり言って、わからないんですよ。なぜ、大湯の講習会に秋田市からわざわざ行ったか。そこらへんは、よくわかりません。ただ、恐らく大湯で講習ありますよっていうことが、新聞に載ってたんだと思うんですよね。

藤本　昨日、山本鼎さんの美術館で見せてもらった資料のなかに、大湯の講習会について勝平さんが書いた当時の魁新報の記事があったんですね。それがまたすごくいい文章で。

新一　あの文章、かなり高揚しているんですよね。

一同　（笑）。

藤本　でも本当に「之を得たり」じゃないですけど、技法云々以前のもっと考え方や精神としての「之を得たり」が、そこにあったんじゃないかって、あの記事を見て思いました。

新一　あと私から見ますと親父とじいさんとの戦いなんですよ。っていうのは、じいさんは左官で職人、生活のことをしてますよね。親父の場合、そこから抜けようとしてて。その当時の師範学校に行って、教師になって、絵を続けようと思った。それをじいさんに反対されて、結局、独学でやる。仕方がなかったんですね。私から言わせると、親父がここまでやったっていうのは、じいさんと親父との、意地の張り合いですね（笑）。

藤本　ある意味、おじいさんの時代の価値観と、得之さんの世代のあたらしい価値観との戦いというか。

新一　そうですね、やっぱり時代っていうのはありますね。ただ、性格的には、私の親父は芸術家っていうよりも職人なんですよ。

藤本　なるほど。記念館のなかに、棟方志功さんと並んでる写真が飾ってありますけど、どう見ても芸術家とサラリーマンですもんね（笑）。あまりに対照的というか。勝平さんはシュッと落ち着いて、紳士な感じで。

新一　俺の親父の場合はほとんど、酒も飲まない、タバコも吸わない、賭け事は一切やらない。当時は仕事仕事で暮らしてるようですね。

藤本　そのへんは池田修三さんもすごく似ていますね。お酒も飲まないし。なにか自分のなかで決めてるルールみたいなものがあって。そこがある種、勝平さんの姿と被るというか、そういうお手本みたいなところがあったんだろうなって。

新一　池田さんも、どちらかといえば、芸術家タイプじゃないんじゃないですかね。

藤本　そうですね。コツコツとやる人なんですよね。ある意味、秋田っぽいのかなと思ったりもするんですけど。山本鼎さんが言った農民美術の考え方って、やっぱり西日本よりは、東北の方がしっくりくる。

新一　冬が長いですからね。いまは1月になっても太陽出ますが、私がたが小さいときですと11月から1月っていうのは、太陽を見ることがなかったですからね。だから、本当に、冬ごもりというか。

藤本　そもそも農民美術が生まれた長野県だから、この時代でもなお、引き継がれている農民美術の姿を見てはきたんですけど、長野はそれこそ晴れ間も多いし、冬の厳しさの期間も違うだろうし、農民美術のカタチじゃない、

上「田植」（米作四題 夏）（昭和25年） 下「刈あげ」（米作四題 秋）（昭和26年）
戦後は大画面の作品が多くなり、なかでも「米作四題」は勝平版画を代表する、幅1.3メートルを超える大作。機械化される前の秋田の農業が、いきいきと描かれています。

農民美術の精神みたいなものは、実は東北の方に脈々と残っているように思うんです。

新一　私は、農民美術を一番体現したのは、私の親父だと思うんです。

藤本　絶対そうだと思います。

新一　一生をそれに懸けたという感じがしますね。

藤本　そうですね。一番最初に、創作版画協会展に選ばれた、昭和4年ぐらいの作品でしたっけ、「八橋街道」と「外堀の夜景」。

新一　ええ。

藤本　あの二つの作品が選ばれたということは、創作版画協会で選んでるのが山本鼎さんたちですよね。例えばそういう受賞のタイミングとかのときに、東京で山本鼎さんと勝平さんが会ったりしてるのかなあと想像するんですけど。山本鼎さんとの交流の証拠みたいなものって何か残ってたりしませんか？

新一　いやあ、ないですね。年代的な違いもありますね。

藤本　20歳違うんですよね。でも本当に嬉しかったと思うんですよね。農民美術なる考え方をこの人が唱えてくれて、そのことに共感した自分が、その人の作った創作版画という世界のなかで作品が評価されたっていう喜びは相当なものだったんじゃないかなあ。

新一　そうですね。

藤本　その後、帝展に選ばれてもいますけど、やっぱり最初に入選したあのときが嬉しかったっていう言葉も確か残ってましたよね。

新一　おそらく、人形関係の展覧会もありますからね。会ってると思うんだけど……。

矢吹　木彫を教えてくれた木村五郎さんとの関係も、ものすごく深かったように見えますけど。

新一　そうですね。木村さんとは亡くなるまで連絡をとっていたようですね。結局、木村さんが師匠みたいなもんですからね。あとはみんな独学ですからね。

藤本　そうですよね。直接的に教わった人っていうのは木村五郎さんだけなんですもんね。

新一　ええ。

矢吹　大湯の講習会のときも、夜な夜な語り合っていたとか。

新一　親父はね、自分の生き方をそこで決めたんじゃないですか。

藤本　これでいこうって決めたんだろうな。木村五郎さんって、若くして亡くなられてますよね。

新一　ええ。それで実は木村五郎さんは建具屋（指物師）さんで。タウトが建築家でしょ。親父の親友が舟山三朗っていう日本画家なんですが、その人は大工さんの子どもなんです。親父は左官屋の子どもで。みんな建築の人間の繋がりがあるんですよね。

藤本　芸術家というよりは職人の血なんですね。

新一　そうですね。師弟関係って言える人は木村さんだけで。あとは全部独学で。

藤本　学ぶことに対する飢えみたいなのが勝平さんはすごくありますよね。

新一　それはあると思うんですよね。

藤本　自然科学とか民俗学とか、そういう専門家と行動をともにしたりとか。

新一　当時の新聞社とか、当時の文化人との交わりから、民俗学的なものを勉強してるんですよね。あんまり私は親父との会話っていうのは、記憶にないんですが。ただ南方熊楠（みなかたくまぐす）の本を大事そうにして。「この人は有名な人だよ」ってね。

藤本　へえ～～。

新一　おもしろい名前だから、記憶にあるんです。おそらく、あれが民俗関係への興味の一つになるんでしょうね。あとは、宮沢賢治、浜田広介とかの絵本を買ってもらった記憶がありますね。

藤本　なるほど～。通底してるものがありますね。

新一　ただ、実際の交流はどうしても秋田という狭いなかの文化人の交わりですからね。それが例えば、棟方さんのように一流の……。

「男鹿のナマハゲ」（昭和37年）
晩年、「秋田風俗十二ケ月」を描く予定が、ついに叶わなかったものの、息子の新一さんいわく「自分が楽しむために作ったもので、若い頃に戻ったような、親父らしい作品です」。

藤本　河井寛次郎とかになってくると、また違いますもんね。

新一　東北のなかで秋田は恵まれた土地だったんですよね。米も穫れるし、干拓前の八郎潟は小魚、冬はハタハタも大漁で。だから、外へ発信する必要がなかったんですね。完結してるっていうかね。

藤本　おもしろいなあ。その代表ですね、勝平さんっていう人は。いまの世のなかはもう、上へ上へとか、一番になるぞ！　っていう時代ではなくて、自分たちの身の丈の範囲での豊かさとか幸せについて、考えはじめてる若い人が増えてると感じていて。実はそういうことを、僕たちよりも随分前にやってのけてた人っていうのが勝平得之なんじゃないかなって思うんです。

新一　でも残念なことに、現代の若い人と勝平得之の接点がほとんどないんですよね。どうしても風俗画的なものが多いので、あんまり若い人は興味ないんですね（笑）。

藤本　そこを繋げるのが僕たちの役目だと思ってます。今日は長時間ありがとうございました。

新一　こちらこそ。

第3章

知られざる勝平得之

天吉会議

勝平得之の息子さんである新一さんにお話を伺った僕たちは、のんびり秋田チームお気に入りの「天吉食堂」に移動。遅めのお昼ご飯を食べながら、この2日間の取材を整理します。秋田を出ることができなかった自分を、農民美術という考え方が肯定してくれた、かつての勝平の喜びを想像しながら、僕はあらためて山本鼎の「自分が直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならない」という言葉を思い返していました。そして僕たちも、この取材期間のなかで、何かしら自分たちなりの手仕事を生み出すことはできないだろうかと、みんなでそんなことについて話し合いました。

もう1人の小笠原さん

さて、ここでチームを二つに分けて別行動をすることにします。まず一つは、秋田市内の画廊さんや古書店さん、骨董屋さんなどに行き、かつて勝平が残したさまざまな仕事を探るチーム。そしてもう一つは、僕がどうしてもお会いしたいと約束を取り付けていた小笠原さんというかたに話を聞きに行くチーム。もちろん小笠原さんといっても、上田市立美術館の小笠原正さんではありません。秋田市に住む小笠原光（テル）さん。今回の取材にあたり、過去にまとめられた数々の書物や資料を読んだのですが、僕がもっともそのお仕事に感動したのが、小笠原さんがかつて秋田県立近代美術館の学芸員をされていた頃に、展覧会に合わせてまとめられたという詳細な年譜でした。早速ですが、ここから小笠原光さんのインタビューをお届けしたいと思います。そこには知られざる勝平の姿がありました。

小笠原光さん（67）インタビュー 前編

一同　よろしくお願いします！

小笠原さん（以下敬称略）　お願いします。

藤本　今回取材をはじめるにあたって、うちの矢吹から小笠原さんが制作された展覧会図録の年譜のコピーをもらったんです。それで見てみたら、これはもうただの年譜じゃないぞと。その事細かさと愛のあるお仕事に感動したんです。それで僕はもう単純に、小笠原さんがどうして勝平にそれだけのエネルギーを注がれたのかっていう、そこがまず知りたいと思って、今日はやってきました。

小笠原　ありがとうございます。当時、秋田県立近代美術館にいまして、ちょうど生誕１００年ということで勝平さんの展覧会をやるべきだろうという流れがあり。ところが、うちよりも先に、秋田市で没後30年を記念した大きな展覧会を秋田市千秋（せんしゅう）美術館でやったんですよ。なのに県立近代美術館でもやってもらえないかっていう話になり、それを私が担当することになったんです。

藤本　なるほど。

小笠原　市でもやるんだけど、県でもやってほしい、という流れのなかで、二番煎じにならないようにするには、先にやる市の展覧会とは違った切り口が必要になると。でも、切り口を変えるということは、私自身が、勝平さんがどういう人間だったのかということを知らないと、どうにもならない。でもはっきり言って、勝平のことを私はよく知らなかったんですよ。それで知ろうとするんですけど、それまで勝平さんについて、いろんな人が文章を書いてますし、それなりに年譜もあったし。勝平さん自身もいろんな本を出してるんですよね。そういうたくさんの資料があるなかで、あたらしい切り口って、これはすごく困ったんです。それでいままであったものに頼っていてはどうにもならないので、まず、残された資料を自分の目でもう一度見ようということで、新一さんのところと記念館に行って、とにかくなんでも見せてくれということで、お願いしたんですよ。

一同　へえ〜〜。

小笠原　それで、一番最初に見たのは、彼が描いたスケッチブック。丁寧に全部精査したんです。それと並行して、当時の新聞とか雑誌の中に出てくる勝平さんの動向を全部拾ってみた。それから、新一さんのお宅で残された書簡を全部読みたいということで、ダンボールでドンと借りてきて、他の人にも手伝ってもらって、一つ一つ、全部読んでいって。

一同　すごい。

小笠原　それを全部、時系列に並べてみたんですよ。そうやって、彼が書き残したものとか、新聞に書かれた勝平さんの人間像みたいなものとか全部を積み重ねて年譜の中に書いてみると、勝平さんってこんな人だったんだなって。

藤本　はっきりと見えてきたんですね。

小笠原　そうそう。勝平さんはとっても寡黙な人だってずっと言われてきていたのが、新聞なんかに書いてる文章は、すごい饒舌なんですよね。

藤本　そうですよね。

小笠原　いろんなこと書いてるんですよ。私はこう思うっていうことを。これのどこが寡黙かなって思ったんですけど（笑）。

一同　あははははは（笑）。

小笠原　結局、日常に接してる人は、寡黙だっていう評価が多いんですよ。ところが、彼はいったん、自分の仕事のこととか芸術に対する思いみたいなのを語り出すと、すごい饒舌なんですよね。

藤本　はい。

小笠原　もう一つおもしろかったのは、手紙を見ると、交遊の範囲が非常に広い。それから、ものすごくマメな人。あらゆることを書き留めて、収集して、きちんと整理してるんです。ですから、秋田の戦前の作家たちの活躍みたいなものが勝平さんが集めた資料のなかに全部出てくるんですよ。秋田の文化人とあちこちで繋がっている。で、その人たちは、勝平さんとものすごく親しくなるんですね。各地域で非常に文化的な活動をしていて、柳田民俗学みたいなのをやってきた人たちもいるし、それぞれの人たちが地域で非常に大きな力を持った人であり、かつ、県内での文化活動に影響力を持った人たちだったんですよね。そういう人たちと交遊している勝平さんって、もっとすごい広がりがある、奥の深い人だったんじゃないかと。しかもその人たちがみんな、いついつ勝平さんが来ることになってるので非常に心待ちにしているみたいなことを文章に残してるんですよ。よっぽど彼と話すことが楽しくおもしろいことだったんですね、きっと。

矢吹　寡黙なかただって言われてるのに、会うと楽しいってみんなが言うのは、きっとね。

小笠原　喋ってるんですよ。

一同　（笑）。

藤本　だよね。お金持ちの友だちの書架にある蔵書が自分が持てないようなものがいっぱいで羨ましいとか、ああいう言葉を見ても、学びたいっていう欲望っていうか、底なし加減がすごいなと思って。

小笠原　よく読んでますね。

藤本　いえいえ。そういう能動的な勝平の姿ってあまり秋田の人たちにも伝わってないですよね。

小笠原　スケッチブックなんか見ていても、最初は日付とタイトルくらいだったのが、次第に情報が増えてくるんです。例えば、秋田の民俗行事のスケッチでも、そもそもこの民俗行事は、なぜ、どのようにして行われるようになって、どういうお祭りの手順があって、何をするのか、みたいなことが延々と書いてあるんですよ。

藤本　スケッチというより、取材ですね。

小笠原　その取材の仕方が民俗学者なんですよ。彼の絵ってシーンが非常に詳細でいろんなものが描いてありますよね。

藤本　そうですね。絵の中の人たちそれぞれが生活してる感じが全部描かれてある。

小笠原　部屋の中はこんな様子で、いろいろな家具があったり物があったりして、説明的じゃないですか。あれって、通り一遍では描けないですよ。理屈がわかってて、こういうふうな生活をしてるんだっていう民俗学者的な観点があればこそですよね。そういったのが断片的にスケッチブックの中に残されてるんですよね。

藤本　なるほど～。

小笠原　戦前はもう少し見え方が違ってたんでしょうけど、勝平さんが昭和46年に亡くなって、それから大分長い年月が経っているので、当時は見えてた姿も見えにくくなって。

藤本　そうですよね。

小笠原　勝平さんは66歳とちょっとで亡くなってしまってるんで、その後、周りの人たちがいろんなことを書いたり喋ったりはしてるんですけど、そういう生前のことを知る人たちももういなくなってしまったので。実感が、伝わらなくなりつつありますね。

藤本　そんななかで、僕としてはやっぱり木村五郎さんと勝平の関係っていうのを、いまのうちにしっかり明らかにしておきたい、って思うんです。

小笠原　木村五郎とやりとりした書簡はたくさんありますね。

矢吹　すごく何度もやりとりしてますよね。

小笠原　勝平さんが非常に熱心に仕事を続けていってたので、木村さんは、彼に思いを託すようになるんですよね。だいたい2～3年すると、得之が田沢湖の方に行って指導する側にまわってるんですよ。

一同　へえ～～。

小笠原　木村さんからすれば、自分たちの農民美術運動の本当に目指すべきものを、勝平さんがきっと継承し体現してくれるというふうに思ったんだと思うんですよね。

藤本　そうですね。

小笠原　版画についても、人形についても、木村さんはとても丁寧に評してくれてるんです。

藤本　なるほど。実は上田に行って、山本鼎さんの話をいろいろ聞いていると、見えてなかった人物像がだんだん見えてきて。簡単に言ってしまうと、いろいろやり散らかした人っていう感じで（笑）。「あとは任す！」って次へ次へとあたらしいことをやって、借金は増えて、っていう。でも逆に言うと、本当に気持ちがあって説得力があった人だからこそ、いろんな人たちを巻き込むチカラがあったんだろうなって。木村五郎さんも本当にそこに共感したんだろうと思うんです。でも、各地方のワークショップに山本鼎は来てないんですよね。

小笠原　そうですね。

藤本　だから現場のリアルを知ってるのは、よっぽど木村五郎さんで。

小笠原　そうですね。

藤本　使命を持ってやっていた木村五郎さんにとっても、勝平っていう人物との出会いっていうのは、とっても大きな喜びだったんだろうなって。

小笠原　そうですね。よっぽど親しくなったんだと思うんですよ。木村五郎と勝平さんが一緒に十和田湖の方に行ったりした写真が残ってるぐらいなので。

一同　へえ～～。

小笠原　だから、木村さんが旅館に泊まっているときに勝平が押しかけて行ったりして。

矢吹　夜な夜な話して。

小笠原　そうそう。情熱的に制作について語る勝平さんを彼は非常に好ましく思ったんでしょうね。

矢吹　具体的な技術とか、芸術そのものについて語り合う仲間なんていなかったかもしれないですよね。

藤本　昨日、上田の美術館で、当時の秋田魁新報の勝平が書いた記事、大湯に行った後の新聞記事を見せてもらったんですけど、まあ～気分の高まりというか、高揚感っていうか。

小笠原　そうそう。

藤本　すごいですよね。ある種の饒舌さっていうか、明らかに寡黙ではない。

小笠原　それに、いまだとなんとも思いませんけど、当時、木村五郎が来て講習会が開かれるということを、どうやって勝平が知って、さらにここ秋田市から遠く十和田湖の近くまで行くなんてことができたのか？

藤本　そもそも自分の寄稿した木版画を新聞に使ってもらっている関係性があったことがまず大きいと思うんですけど、その上でおそらく講習会の情報は、魁新報の人に教えてもらったのかなって思うんです。それで、さらに原事を読んだときに、ふと思ったんですけど、誰でも記事って書けるわけじゃないじゃないですか。

小笠原　そうですね。

小笠原　おっしゃるとおりだと思います。僕も調べたんですけど、わからなかったんですよ。新聞に広告は出てるんですよね。だから、あるということはわかったのかもしれないですけど、どうしてそこに行けたのかっていうのはわからないです。しかも20日間とか、滞在がけっこう長いんですよね。

藤本　旅費などの経費を考えるだけで相当大変ですよね。

小笠原　そうですよね。20日間も仕事放り投げて向こうにいて大丈夫だったっていうのが、ちょっと考えにくいですよね。決して裕福な家ではないので。

藤本　ほんとに。それでいてあの記事は、ちゃんと説明すべきことが簡潔に説明されていて、文章としてもすごく良くて。本当に書ける人だなって。それこそいろんなものを読んでいた人なんでしょうね。

小笠原さんとの話はさらに勝平得之とその時代の本質へと迫っていくのですが、ここでいったん、小休止。もう一つのチームの動向を見てみることにします。

第4章

のんびり美術運動

もう一つのチーム

僕たちのチームが小笠原光さんにお話を伺っているその間、もう一つのチームは、秋田市内の画廊や骨董店などを駆け回っていました。というのも、実は僕たちのんびりメンバーも農民美術にチャレンジしたい！と考えていたのでした。「勝平の秋田風俗人形にならって、木彫りの人形を作ってみる？」「できるかなあ～」「教えてもらったらできるんじゃない？」「誰に？」と、この調子で実際に何にチャレンジするべきなのか、その答えを見つけられないでいた僕たちは、かつての勝平の仕事を再確認しようと町へ出たのでした。

民俗版画集

秋田においては、いまもなお根強い人気の勝平得之の版画作品。記念館にあるような大きな版画作品にはなかなか出会うことができなかったようなのですが、そんななかで比較的よく目にしたのが『民俗版画集』と書かれた葉書サイズの版画セットだったとのこと。わらべうた、凧、小正月の行事など、さまざまなシリーズに分かれたそのセットは、それぞれに勝平の手による3種類の版画葉書が入っていて、それはまさに小笠原光さんのお話にあったように、勝平が民俗学者のごとく、自ら各地を取材して回ったその成果でした。しかもそれはとても安価だったようで、おそらく秋田風俗人形のようなお土産品として、勝平が作り続けたものだったようです。

勝平得之作
民俗版画集

のんびり美術

秋田市内駆け回りチームの話を聞き、また撮影された写真を見ながら、ようやく僕たちのなかで答えがはっきりしました。僕たちも、秋田のあたらしいお土産になるような版画葉書を作ろう。もちろん木版画で。図柄を描き、版木を彫って、摺るまで、全部自分たちでやる農民美術ならぬ、のんびり美術！

そうと決まれば、早速準備にとりかかります。勝平得之の地元、秋田市大町の紙屋さんや画材屋さんで、いくつかの紙を選び、さらに彫刻刀や版木などを購入。何かをはじめようと道具を揃えていくあの時間独特の幸福感に、かつての勝平を思いながら、その一方で、いったいどういう図案にするべきか？　についてみんなで話し合います。

留まることで見えてくるもの

きっと勝平は、秋田の地に留まることに腹を括ったその瞬間から、この町の良さが見えてくるようになったのだと思います。自らの範囲を決めたからこそ見えてくるものがあると、僕は強く思います。実は、僕自身も編集者として一つ心に決めていることがあります。それは海外に行かないということ。こういう仕事をしていると、尊敬すべき先輩がたや、同業の仲間たちは、さまざまな文化を海外で体感し、それをもとに魅力的なお仕事をされています。しかしそんなふうに日本を越えて、精力的に良いお仕事をされている人ほど、僕の選択を受け入れてくれます。僕が決して消極的な意味でそう決めたわけではないことを理解し、僕なりの誠実を、僕の生き方を肯定してくれます。それはある意味、勝平得之と山本鼎の関係だと、今回の取材のなかで僕は感じていました。

共通した思い

秋田に留まり、秋田に向き合うことを決めた勝平の目には、秋田の良い物がたくさん映りはじめたはずです。そして、そのことはのんびり秋田メンバーも同じです。秋田で生きていくことを決めたのんびりメンバーの目に映る秋田の良きものをモチーフに描けばよいのだと僕は思いました。そして何より、勝平がそうであったように、僕たちもこの町のスペシャリストのみなさんとともに、秋田の良きところをさまざまに取材してきました。そんな自分たちの成果を表現すればいい。きっとのんびりチームみんながそう思ったんだと思います。気づけばみんなが『のんびり』のバックナンバーを眺めていました。

モチーフ決定

そしてついに、僕たちのんびりチームによる民俗版画集の内容が決定しました。シリーズタイトルは「秋田の偉人」！　これまで僕たちが特集を組んできた秋田の偉人たちのなかから3人を選んで木版絵葉書にします。その3人とは、のんびり7号で特集した石川理紀之助（りきのすけ）、のんびり12号で特集した成田為三、そして今回の勝平得之。なんとか方向性が決まったところで、今日は時間切れ。明朝から作業開始することにします。

7月7日

翌朝、のんびり編集部に集合したのんびりチーム。早速、のんびり秋田デザイナーのシブ（澁谷和之）を中心に、みんなであーだこーだと言いながら図案を完成させていきます。石川理紀之助、成田為三、勝平得之という偉大なる3人が、それぞれに天国でのんびりしているという、なかなかかわいらしいイラスト。シブが絶妙な加減で描いてくれたその図案を、カーボン紙で版木に転写。そしていよいよ地道な版木彫りがスタート。とはいえこれが見事に初めての作業ゆえ、YouTubeで彫り方の動画を見て勉強。「あっ、眉毛が取れた！」なんてハプニングを何度も何度も繰り返し、毎度心折れそうになっては交代し、延々と作業を続けること約6時間。ようやく彫刻刀にも馴れてきたところで、次は版画3枚をおさめる封筒のデザインに取りかかります。そのときに、のんびり秋田カメラマンの陽馬が出してきたのが、昨日とある骨董屋さんで見つけたというロシア人形。とてもかわいらしいその人形の裏を見ると「農美」と書かれたシールが貼ってありました。

のん美

それを見つけた骨董屋さん自身も、はっきりとはわからないということだったらしいのですが、これはもう紛れもなく、農民美術のマークだと僕たちは思いました。そもそも山本鼎がロシアで農民美術を知ったことからはじまった農民美術運動です。農民美術の一つとして日本でロシア人形が売られていた時代があってもおかしくありません。ということで僕たちはこの農美マークを模して、「のん美」マークのシールを制作。葉書セットの封筒に貼ることにしました。

Nonのんびりな性

ある程度まで仕上がった版木で、いよいよ試し摺り。しかし意外に彫りが甘いところが見えてきたり、インクがうまくのらなかったりで、なかなか思うように進まない、まさにのんびりなのんびり美術。しかしそうも言っていられません。というのも、今回の取材に充てられる日程は明日1日を残すのみ。もちろん明日もう1日あれば完成までいける目処はたっていますが、それでは満足できないのが、のんびりチームの性。せっかく完成した商品を、どこかで実際に売って、作る数にもよるけれどもできれば完売させたい。さらにはそのお金でみんなで美味しいご飯を食べたい！　と思っていました。そこで、のんびり秋田メンバーの田宮さんが、急遽県庁や市役所に連絡を取って、秋田駅の近くで明日行商できる場所を確保。明日の17時には、販売を開始することを決めたのでした。

その後、結局夜中まで作業が続いたもののさまざまな失敗の連続で完成まで至らず。仕方なく明日に作業を持ち越します。さて、このまま明日の夕方までに完成させることができるのか？

7月8日 ギリギリ作業

特集取材最終日。いよいよヤバいと早朝から集結したのんびりチーム。昨夜のうちに、彫りはだいたい進めたものの、摺りの作業が意外に難しく、何度も何度も失敗を繰り返します。しかも版画用のインクが見事に乾かない。そろそろお店の準備もしなければいけないのに、まったく乾かないものだから、版画と版画の間に藁半紙を挟んで封筒に封入。さらに封筒に摺ったインクも乾かないものだから、丸ごと

新聞紙で包装。予想以上にかかる手間に、刻々と迫る時間。こういうときこそ焦ってはいけないと、粛々と作業を進め、なんとか完成したのは25セット。大慌てで路上販売の許可をもらった駅前のとある広場へ移動。りんご箱を使ってお店を作り、17時過ぎにさあ販売開始！

苦戦

平日の夕方ということで、電車の発着の度に、仕事帰りのかたがたくさん目の前を通って行きます。しかしながら、突如現われた「のんびり美術」なる、妙なお店に近づく勇気をもった人は、秋田にはほとんどいません（笑）。店員の人数が多いと余計に近づけないだろうと、少人数で交代してみたり、女の子だけにしてみたり、ときには髭の男だけにしてみたり、いろいろと試しながら販売を続けるうちに、ポツポツと売れはじめ、気づけば25セットあった、のん美手摺り版画セットも残り一桁にまで！　これはもう完売できるんじゃないか？　そう思いはじめたあたりから、急激に売れなくなってしまいます。気づけば19時を過ぎて、いよいよ人の数が減ってきたのです。しかしながら、許可をとっているのは20時まで。のんびりチーム最後のチカラを振り絞り、通る人に声をかけては、説明して、なんとかかんとか買ってもらうを繰り返し、いよいよラスト1セット。しかしここからがまた売れない……。いよいよタイムアップかと思った19時56分。スーツ姿の女性が颯爽と現われて「のんびりいつも見てるよ！　応援してるから！」と、最後の一つを買ってくださって、見事完売！

乾杯！

どうにか完売することができたのんびり美術。僕たちが最後まで踏ん張り続けることができたのは、まさに「自分で直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならない」という考えを、自分たちなりに実践してみたからこそでした。自分たちで取材し、実感をもって素晴らしいと感じた、秋田の3人の偉人たち。かつ、それらを自分たちなりの表現と技術で完成させたこの商品を僕たちは心から良いと思っていました。そしてそれを買ってくれる人がいるということ。僕たちは確かに農民美術の喜びを味わいました。キンキンに冷えた生ビールとともに。

第5章

勝平得之が得たもの

小笠原光さんインタビュー 後編

勝平得之のあらゆる資料を読み尽くし、壮大な年譜をまとめられた小笠原光さん。これまでのイメージとは違った意外な姿が見えてきた前編に続き、本特集の締めとして、勝平得之とその時代の空気に迫ります。勝平を知ることで見えてくる未来。じっくりと読んでみてください。

小笠原　勝平も、大正期の絵をやりたいっていう気持ちを持っている若い頃の絵っていうのは、全く、目が向こうを向いてるんですよ。

矢吹　外を見ている。

小笠原　秋田ではないんです。中央で活躍している人たちと同じようになりたいというような思いがあって。

藤本　竹久夢二のような。

小笠原　そうそう。そういう方向だったのが、はっきりと変わってくるのが、木村五郎の指導のおかげなんですよね。やっぱり、自分が日常で見てるもの。例えば農村の風景だとか農民の生活、服装とかを、これって美しいって思うには、若いときには、なかなか。

藤本　そうですよね。本当に。

小笠原　だから彼の気持ちとして、簡単に秋田は素晴らしいと思えって言われても、そうはいかないですよね。だけど、木村五郎が日常の市井の人々をモチーフに彫刻を作っていったというところから、そんな身近なところに美しさを発見できるんだって、彼は感激したんだと思うんです。しかも東京に行きたくても行けないわけですよ。

藤本　そうですよね。

小笠原　どう頑張っても、家から何から全部捨てて東京に行くっていうのはできないわけだから、非常に悶々としているところがあるなかで、こんなに素晴らしいものが自分のまわりにたくさんあって、それをあたらしい目で見ることができるんだよって教えてもらったことは、すごい出来事だったと思うんですよね。そこから、せっせといろんな人形を作り、多色摺りの版画も作れるようになっていくわけですけど、それでも彼にとってみれば、100パーセントそれで正しいかどうかっていう疑問はずっと残ってたと思うんですよ。本当にこれでいいのかっ

て。でも人形はどんどん売れるわけですよ。生活的に制作が間に合わないくらい売れてるわけですから、だいぶ楽になったと思うんです。新一さんもよくおっしゃるんですけど「人形作ってるときは良かったんですけどね」って。版画に転向したとたんに生活が大変になってしまったっていうようなことをおっしゃってましたから。でもそこでまた幸いなことに、ブルーノ・タウトが現われるわけですよね。

藤本　そうですね。

小笠原　結局、タウトの目から見れば、古い日本の家屋だったり、市井の人々の様子だったりが素晴らしく映っていて、だからこそ勝平の作品を自分の本の中で紹介したい、世界中に知らしめたいと。そういう外から入ってきた目線が、素晴らしいもので溢れている世界にまたしても気づかせてくれたっていうのは、不安が一気に払拭されたんじゃないかなと思うんですよね。

藤本　心が折れそうなタイミングでパッと来てくれたんですね。

小笠原　あなたの作品も素晴らしいって彼が言うわけですから。そこで確たるものを初めて自分のなかに確立することができたんだと思うんですよね。ところが、問題が一つ出てきて、農業

自体もどんどん変わっていく時代で彼は生きているわけですよ。彼が最初に見た秋田。素晴らしい秋田がどんどん変わっていってしまうわけですよね。だけど、彼のなかでは、タウトたちが認めた秋田の生活みたいなものを、伝えたいし、残したいという。

藤本　そうですよね。

小笠原　それで、理想の秋田というか、農民というか、農業というか。そういうものを自分のなかで消化して、みなさんに発表したいというふうな気持ちが生まれたんじゃないかなと思うわけですよね。

藤本　昔は目の前の風景を版画にすればよかったのが、だんだん記憶の風景を出さないといけなくなっていったんですね。

小笠原　そうですね。そういうこともあって、彼は記録しようという気持ちが生まれてきた。だからこそスケッチブックの中に、いろんなことを書き留めていったんだと思うんですよ。

藤本　そこにはすごい使命感がありますよね。

小笠原　そうですよね。彼は、失われていく農村の生活みたいなものが、素晴らしい秋田が、変わっていってしまう畏れみたいな思いもあったんじゃないかなと思うんですよ。

藤本　このことに誰も気づいてないんじゃないか？　っていう焦りもあったんですかね。

小笠原　少なくともこれは自分のライフワークとして、ぜひともやり遂げたいという思いがあったと思います。戦後になって、いろんなものが出てきても、相変わらず牛や馬が田を耕しっていう絵じゃないですか。しかも、彼の絵って若いときから晩年まで、出てくる人の表情がずっと同じなんですよ。変わらないんですよ。つまり、にこやかに、美しい、素晴らしい、秋田に生きている人たち。人の心に温かく響くような表情をした人たちが日常の生活を送っている秋田なんですよ。一種の桃源郷のような秋田を描き続けたかったんだろうなと思うんです。

藤本　なるほど。

小笠原　そういう意味では、彼がバックボーンとなるものを生涯失わずにやり続けたという評価は大きいのかなと。

藤本　そのバックボーンこそが農民美術だったわけですね。そもそも木村五郎さんと、勝平の年齢の差はいくつぐらいなんでしょうか？

小笠原　確か5つくらいしか違わないと思います。

藤本　木村五郎さんは、ある種、勝平に自分と同じものを見たっていうか、弟子とかじゃなくて、同志というか。年齢も近いし、また勝平の技術力の高さは絶対感じたと思うし。上田でいっぱいいろんな人の木っ端人形を見せてもらって来たんですけど、やっぱり勝平のだけが群を抜いてクオリティが高いんですよね。

小笠原　そうですか。

藤本　面取りの加減とか、デザイン力とか、造形の力が圧倒的に違うんですよ。

小笠原　そうなんだ。上田のを見てないですから。

藤本　ほかのはもっと細かかったりするんですよ。それってどこまで量産できるの？　とか。

小笠原　勝平さんは職人的なので、大量にスピーディーに作るにはどうしたらいいか、細かいところをグダグダやるよりは、ノコギリでバシバシ落としてそこから進めていくみたいなやり方があって。でも、そういうふうにシンプルに作るということは、非常に人形自体がエネルギッシュだから。

藤本　そうですよね。

小笠原　そうやって、さらに自分なりに秋田のものを工夫したりしてるので、発展していってるんですよ。そういう、のめり込み方が尋常じゃないっていうか。やりだしたら、次々にいろんなことを自ら考えて実践するっていうところがあるので。木村さんにとっては、彼のそういう生き方そのものが、非常にインパクトがあったんだと思いますよね。

藤本　あと、もう一つ。木村五郎さんはすごく若くして亡くなられるじゃないですか。そのショックたるやなかったろうなって思うんですよ。

小笠原　例えば昭和4年の7月に、木村五郎さんから勝平さんの版画作品についての感想と大湯人形の不振を気遣う書簡っていうのがくるんですよ。版画については、「正直なところ思っていたより良かったので、愉快でした。昨年見せてもらったものに比べると格段の進歩であり、アマチュアの域を脱したかのような感があります」それでいろいろな批評があって、「自分のアトリエの壁にピンで貼って眺めています」これぐらい、かなり具体的に書いてるんですよね。

藤本　そうですね。

小笠原　昭和5年に、また木村五郎が大湯に来てるんですよ。昭和4年の4月の手紙のなかで、人形を送ったので、「2点は山本氏に差し上げるようにいたします」っていうふうに書いてるんですよ。山本鼎にあげてるんですよね。

藤本　鼎さんも見てくれたんですね。

小笠原　はい。いろんな版画家とかに、彼の版画なんかを紹介して、評をもらったりもしてるんですよね。そういうことを勝平さんに伝えていて、勝平さんが版画家として歩み出すための道を作ってあげてるんですよ。だから、交遊の範囲が、木村さんを通じて次第に広がっていってるんですよね。

藤本　なるほど。

小笠原　それで、彼は亡くなるんですけど、その道がバシンと切れちゃうのではなくて、いろんな人との繋がりを作ってあげながら亡くなってるので。

藤本　なるほど。木村さんがいろんな道を作っておいてくれてたんですね。

小笠原　そうですね。それですぐに展覧会に出品するようになって、昭和4年にはじまった秋田美術展というのがあるんですが、そこには平福百穂（ひらふくひゃくすい）という秋田出身のとっても有名な日本画家がいたり、福田豊四郎という有名な絵描きの参加もあったりして、そんな人たちも勝平の絵を見て、とっても高く評価してるんですよね。

藤本　福田豊四郎さんは、だいぶ先輩ですか？

小笠原　そうです。豊四郎は昭和5年の第十一回の帝展で特選をとっているので、勝平が秋田美術展に参加する頃はすでに一流ですよ。帝展に入っただけでも絵描きだと言われるのに、特選とってるわけですから。遥か雲の上の人っていう感じです。

藤本　なるほど。

小笠原　そんな人が第三回の秋田美術展で彼の版画を評してですね、「あの人は都会になど出ないで秋田にいて、ほかの雑な野心を捨てて、本当に自由な気持ちで思うままいってもらいたい」って（笑）。

藤本　すごい。出て来られると怖かったのかなって、勘ぐってしまうほどの文章（笑）。

一同　（笑）。

小笠原　そういうふうな人たちとも、繋がりを持っていったんですよ。豊四郎は中央画壇で活躍してるし、百穂も中央では横山大観（よこやまたいかん）に匹敵するような力量の持ち主だということで、そういう人たちと一緒に展覧会に出品することができるようになっているので、結局、支えてくれる人たちが次々に生まれてきてるんですよね。

藤本　圧倒的な力があったんですね。

小笠原　そこらへんが、後に民俗学をやってる秋田の文化人たちとの繋がりが広がっていくのと同じなんです。

藤本　若いうちからこうやって大御所と付き合いがあるから。

小笠原　そうそう。そこらへんが非常に積極的なんですよね。そういう意味でも木村さんは非常に、彼の出発には大きな力を与えてくれた人なんです。

藤本　この町にいながらっていうか、地方にいながら中央で評価されるって、なかなかのことですよね。それができてたっていうか。

小笠原　そうですね。当時の展覧会に出品したときのことなんかも、向こうの版画家から手紙をもらって「今回のはとても良かった」みたいなことを書いてもらったりしているので、そういうふうに考えると、全然孤立はしてないんだなあと思います。

藤本　そうですよね。勝平が、帝展で「雪の街」で入選したのはいつでし

たっけ？

小笠原　昭和7年、第十三回の帝展ですね。文章が残ってるんですよね。「本展の出品は二枚で、一枚は「雪の街」で一枚は「秋の収穫」を描いた版画であるが、「雪の街」の方が入選しました」と。「通町辺の冬空の下に開けているスケッチで、土蔵や建物の立体的なおもしろさを描きました」みたいなことを、魁に書いてますね。

藤本　なるほど。

小笠原　昭和9年になると、版画雑誌を発表してる人が彼の作品を取り上げて。料治熊太（りょうじくまた）っていう人なんですけど、『版画藝術』という雑誌の中で、『勝平得之版画集―雪の風俗』というのを出してるんですよ。そのあとがきの中に「勝平得之氏の芸術は民族的香気をもっていて、すべて微笑ましい作品である。昨年帝展に出陳された『雪の街』にしても、郷土の風物を愛せぬ人には、あれほどローカルカラーは出ない。雪の国、秋田の風俗も、ゴム靴やウバ車の導入で、素朴、純真な風物もだんだん衰亡してゆくときが来るだろう。その時、この版画は、いよいよ光を増して人々に懐かしい思いを抱かせるであろう」って書いてあるんですよ。

一同　うわ～。

藤本　当時の時代の空気感は正直全くわからないですけど、でもこういう記述が本当に衝撃的で。ここにローカルカラーっていう言葉が出てきましたけど、いま、東京を中心とした世の中があって、そこに大きな震災もあってか、これからは地方の時代だねって、いま僕たちは言ってるじゃないですか。そういうことを、すでに昭和9年とかに「ローカルカラーがあって良い」っていう、その中央の空気ってすごいなと。そこは正直、全然想像してなかったんです。

小笠原　『のんびり』の扉にある、あの文章って、勝平さんに通じるものがあると思うんですよね。

藤本　うわあ、ありがとうございます。読んでくださってたんですね。

小笠原　この「相対的な価値にまどわされることなく　自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う、そんなニッポンのあたらしい〝ふつう〟を秋田から提案しようと思います。」って、これこれ。勝平さん（笑）。

一同　（笑）。

藤本　何もあたらしくないっていうことですよね（笑）。

一同　（笑）。

藤本　そういうことを、また繰り返してるんですね。

小笠原　最初に見たときに、おお～って思いました（笑）。

藤本　でもそれが戦前なんですもんね。でも、そこからまた戦争があって、一回いろんなものが白紙になって、そして高度経済成長があって。いま、それをもう一回取り戻そうっていうときに、昭和9年のこの空気をもう一回、勝平得之をとおしていまを生きる僕たちが表現させてもらうっていうのは、すごく大事な気がします。

小笠原　勝平さんって人気が途絶えないんですよね。ずっと彼の作品に目を向けたいっていう人がどんな時代でもいるんですよね。消えないっていうか。過去の作家にならないところがすごいなって。

藤本　そうですよね。

小笠原　そういう共感を与える何かが、やっぱり勝平さんのなかにはあるんですね。だから、それがどういうものなのかなっていうのが、いろんな人の言葉で語られていくとおもしろいなって。だから、今回みなさんが取り上げて、みなさんの方法で多くの人に語られたら、素晴らしいなと思いますね。

藤本　ありがとうございます。でもそれもこれも小笠原さんがこの年譜をまとめてくださったからこそです。

小笠原　そこからぜひ、発展してあたらしいものを見つけていただけると。

藤本　はい。実は早速いま、年譜を見て気づいたことがあるんですけど、木村五郎さんが亡くなったのは1935年（37歳）だそうなんです。

小笠原　昭和10年ですね。

藤本　昭和10年。勝平さんにとって木村さんが亡くなったショックってすごく辛かったと思うんだけど、この年の夏にブルーノ・タウトと知り合うんですよね。だから、やっぱり救われたと思うんですよね。すごいなあ。使命がある。

一同　うん。

小笠原　繋がってるんですよね。

藤本　いやあ楽しいなあ。

一同　楽しい。

藤本　本当にありがとうございました。

小笠原　いやいや、こちらこそ。

第２回
天使の寒天博覧会

秋田市民市場を会場に、秋田県内各地から19種類もの寒天が大集合！ 20代から70代までの出場者が、その腕前を競いました。今回は審査員としてGomaさんにもご参加いただき、その創意工夫の数々をじっくり堪能していただきました。
最優秀寒天は、藤倉節子さん（横手市）の
「とうふ羊羹抹茶マーブル」

秋田の冷菓の旅

由利本荘市～にかほ市編

秋田県南沿岸地域のかき氷は、甘みのついた柔らかい氷をディッシャーで盛りつけ、シロップをかけて食べるスタイルが特徴的です。

尾留川氷店（由利本荘市）

イチゴ、レモン、ブルーハワイ、あずきをセレクト。お店のお母さんとおしゃべりしながら、夏休みの小学生に戻ったようにのんびり。

土井冷菓（にかほ市）

特別にお願いして、イチゴ、メロン、レモンのシロップを全種がけに！
すぐ側の象潟海水浴場のキラキラの日本海を前に、いただきます！

横山商店（にかほ市）

亡き奥さん秘伝の味を守りつつ、ご主人も新メニューを試行錯誤。ミルクヨーグルトの相性の良さにGomaも舌鼓！

秋田のお母さんたちが作る「天使の寒天」は秋田のおもてなし料理の大定番。でも、手軽に美味しいものが手に入り味覚も変わってきているなかで、秋田の若い人たちのあいだでは作ることも、食べることも少なくなってきています。さらに県外では、秋田にこんな寒天文化があることすら知られていません。これまでの寒天文化を大切にしながらも、新しい観点で楽しめる「ちょうどいいかんてん」はないものでしょうか？ ここはもう、新たな風を送り込むしかない！
料理家さん！　秋田に来て「ちょうどいいかんてん」作ってもらえませんか？

天使の寒天とは？　秋田のお母さんたちは、何でも寒天で固めてしまいます。甘いものから、しょっぱいものまで、おもてなしの心で寒天を作り、さまざまなメニューを生み出しているお母さんたち。このように、寒天を使いこなす人たちは、誰もが「寒天使い」＝「寒天使」といえます。そんな寒天使たちが作った寒天を「天使の寒天」と呼んでいます。

ちょうどいいかんてん

第2回 Gomaさんと秋田の冷菓

今回、秋田に来てくださったのは、Gomaのアラキミカさん、中村亮子さん。
普段からカラフルで楽しいお料理を作り出すお二人に、秋田の寒天と、
ユニークな冷菓をたっぷり堪能していただき、
寒天作りのヒントにしてもらいます。

料理創作ユニット　Goma（アラキミカ、中村亮子）
「食」をテーマに日常の楽しいことや嬉しいことをさまざまな形にして日々製造中。ジャンルや物事にとらわれることない自由で新しい料理活動を目指し、フード提案から雑貨のデザイン、イラストまで全て自分たちでこなす。著書に『GomaのPOPスイーツ』（小学館）、絵本『へんてこパンやさん』（フレーベル館）など。

広栄堂

通称「生グソ」！（生グレープフルーツ氷ソフトクリームのせ）さっぱりさわやかなシロップとまろやかなソフトクリームで、ボリューム満点！

秋田の冷菓の旅

秋田市編

秋田市楢山（ならやま）地区には、手作りの生フルーツシロップが自慢のかき氷店が、向かい合わせで並んでいます。夏にはいつも行列ができるほどの人気ぶりです。

斎藤もちや

生ネクタリン、生イチゴミルク白玉、ひき茶ミルク白玉。お餅屋さんのかき氷だけあって、やわらかーい白玉がたまりません。

「夏の秋田、寒天と冷菓の旅」Goma

『のんびり』の特集を見て衝撃を受けた、秋田の寒天。今回、あろうことか「天使の寒天博覧会」の審査員というカタチで初体験できることに！　胸と胃袋を躍らせて、初めての秋田にやってきました。

工夫を凝らし、各々にストーリーと技術が詰まった寒天に驚かされたり、感動させられたり……。寒天には、秋田のみんなの心の豊かさと美味しさが固められていました。

興奮冷めやらぬなか、2日目からは冷菓の旅。35度を超える猛暑のなか、秋田の冷菓を食べまくりました。尾留川氷店、土井冷菓、横山商店の「新感覚かき氷」にはほんとにびっくり！　何せソフトクリームの機械で作られ、アイスディッシャーで丸くスクープされるのが、かき氷なんて！　口に入れた途端、冷たさと甘さがふわりと溶け合う食感は初めてで、こんな氷の楽しみ方があったなんて！　と目からウロコでした。広栄堂の「生グソ」しかり、秋田の冷菓には、わっと楽しい興奮が隠されていました。

さて、この楽しさを、寒天というカタチにどう落とし込もうか？　わくわくするような、新しい寒天の食べ方を発見したい！　そんな思いでGomaの「ちょうどいいかんてん」作りが始まりました。

秋田の冷菓を満喫してくださったGomaさん。
この旅を経て、どんな「ちょうどいいかんてん」が
生まれるのでしょう？

メロンと西瓜の寒天氷

基本の生果汁寒天

- 果肉（メロン、西瓜）各300g
- 棒寒天　各1/2本
- 水　各50ml
- レモン汁各小さじ1

ミントシロップ

- グラニュー糖　150g
- 水　150ml
- ミント　60g
- 氷（かいたもの）

1

生果汁寒天を作る。棒寒天はたっぷりの水で1時間以上ふやかしておく。果肉をミキサーで粉砕してピュレ状にする。

2

鍋に1のピュレ50ml、水50ml、水気をしっかりと絞った1の寒天、レモン汁を入れて弱火にかける。完全に溶けたら2分ほどくつくつさせる。この時ずっとヘラでかき混ぜ続けること。

3

弱火のまま、ピュレ200mlを少しずつ加え混ぜる。しっかりと混ぜ合わさったら火を止める。

4

水に濡らした型に流し入れて冷やす（西瓜の種が気になるようならざるで漉しながら流す）。同じ作り方でメロン、西瓜と2種類の寒天を作る。

5

ミントシロップを作る。鍋にグラニュー糖と水を入れて火にかけ、砂糖を完全に溶かす。火を止めたら粗熱をとる。

6

ミキサーに洗って水気を拭いたミントを入れて粉砕する。そこにシロップを加えてさらにミキサーをまわす。

7

4の寒天をサイコロ状に切り分け器に入れ、ミントシロップを注ぐ。紙コップにかいた氷を隙間なく入れ、真ん中でひっくり返して盛りつけて完成！

秋田の燈（あかり）

秋田竿燈（かんとう）まつり

毎年8月3日から6日の4日間、秋田市内で行なわれる「秋田竿燈まつり」。竹竿に提灯を吊るし、稲穂に見立てた竿燈を、手、額、肩、腰などでバランスをとりながら支え、災厄払い、五穀豊穣などを願います。国の重要無形民俗文化財に指定され、東北三大祭りの一つともされているこの祭りに、今年は38町内が参加。「ドッコイショ～ドッコイショ」の掛け声とともに、279本の竿燈が秋田市竿燈大通りを彩りました。そして、この美しくゆらめく稲穂の下には、この祭りを支え、繋いできた人たちがいます。

取材・文＝矢吹史子
写　真＝高橋 希・船橋陽馬
Text_Fumiko Yabuki
Photo_Nozomi Takahashi_Yoma Funabashi

Gomaの、ちょうどいいかんてん

秋田で出会った寒天と冷菓たち。見た目や食べ方から受けた衝撃を、一緒に味わってみたい!!そんな思いからチャレンジしたのがこの寒天氷。果汁をぎりぎりまで多めにして夏の果物の味わいを強くし、食感は熱と酸に弱い寒天に、あえてレモン汁を先に加えて加熱させることで、柔らかく口溶けがいい寒天に仕上げました。
口に含むと、すうっと消えてなくなる果汁寒天と、秋田市内で摘ませていただいた野生のミントを加えた爽やかシロップ、そびえ立つかき氷！の3重奏をお楽しみ下さい。

囃子方

八日町竿燈会

五十嵐 貢 さん

元々はこの町内の出身ではないものの、
町内の方からの誘いがきっかけで
八日町竿燈会に関わるようになったという
五十嵐さん。
35年以上の間、毎年この町内で太鼓を叩き、
若い世代に技術を伝え継いでいます。

竿燈の囃子には、上太鼓、下太鼓、笛があります。一つの太鼓を二人で叩くんですが、細かく打つほうが下太鼓、踊る打ち方をするのが上太鼓。

私が入ったときは、「まずは下（太鼓）から覚えろ」と言われて、下だけを練習していて、そのまま本番に引っぱり出されて、そのままずーっとやってきたんですよ。だから私は下専門。

下太鼓は単純に見えるけれど、全ての大元で、その竿燈会のベースになりますから、ここをしっかりやらないと。よく、若い連中にも言うんだけれど「下太鼓は基本で大事なんだけど、自分の意思でなんとでもできるところなんだよ」ってね。自分次第で良くも悪くもなる。

自分がここに来た頃はまだ、竿燈まつり全体でみると、お囃子は裏方さんというイメージが強かったんですよね。今は竿燈妙技会（注1）があるのでいくらか華やかになりましたけど。不思議なもんでね、息が合ってリズムに乗ってるときっていうのは、屋台が揺れるんですよ。でも疲れてくると屋台が動かなくなる。すると、遠くにいたはずのベテランの差し手が来るんですよ。おっかないんですよ「囃子！音出でねぇねが！」って。わかるんですよ、鋭いですよ～。「囃子の音がしっかりしてないと、こっちも身が入らない」と、よくそう言われたもんです。

うちの町内は、ここに住む人より、自分のように町外からの人のほうが多いです。ここに来て、太鼓叩かせてもらって、責任者もやらせてもらって。自分は長くなったから特にですけど、八日町竿燈会のために尽くすのが、町外から来たものの恩返しだろうなと。まずは、ここで囃子を伝え継いでいく、というのが、楽しませてもらっていることへの恩返しになる。

特に自分が入ったころは、婦人会のみなさんが全部、食べ物、飲み物を世話してくれた時代です。全部で50～60人にもなる人たちの分をみんな用意してくれてたんでね。結局、そういうことに対しての感謝しかないんですよ。だから、新しく入って来た子と一緒に練習をして、伸ばしてやって、本番の屋台に上げて、叩かせてやりたいなと。

あれ、結構おもしろいもんですよ。あそこで太鼓叩いて楽しんでるのを見るとね。伸びるっていうのは、おもしろい。教えてると「ああ、この子こんなふうになったか」とか、「なかなか成長できないけど、ここを抜けたら音が出るようになるだろうな」って子もいる。

ちょうど今、太鼓叩いてるあの子、すごいんだよ、本当は。あの子はまだ打てる。これでちょっと打ち方を変えると、すごくきれいに見える。おもしろいよ、伸ばしたら。元は友だちと何人かで一緒に入ってきたんだけど、残ったのはあの子だけ。何かしら自分の中に楽しみがあるからなんだろうね。竿燈だけでないと思うけどな。何でも、自分でやりたいっていうことが大事だよな。

でも、もう隠居、隠居。俺が練習に顔出すと、頼られるんだよ。チャンピオンになった経験のあるやつらもいるのに、でも「自分たちでやった」っていう自覚がないのよ。普通、優勝したなら、そこから新しいチームを作ってやらなきゃダメなのよ。だからオレが離れないと。みんなできるのにやらないから。寂しいってば寂しいけど、彼らがやらないと、ここの囃子はなくなるよって。このままじゃ70歳になっても自分が来ないといけない（笑）。

（注1）竿燈妙技会
「昼竿燈」とも呼ばれ、技術の向上や保存のために開催されており、差し手の団体戦、個人戦と、囃子方に分かれ、基本演技の忠実さ、安定、形の美しさなどを競う。

美しき

上米町一丁目竿燈会

貴志冬樹さん

昨年の妙技会の個人優勝者であり、今年からこの町内の代表を務めている、貴志さん。21歳という若さながら、仲間を率いる毅然とした姿からは、すでに代表としての品格がしっかりと感じられます。

元々、父親がここに住んでいて、今も父は現役ですが、その父に連れられて、2歳半くらいから竿燈を始めました。一番大きな「大若」という竿は、中学2年くらいからやっています。50キロくらいあって、高くなるほどに難しいんですが、あとはバランス感覚で、慣れですよね。

妙技会では5人一組の団体戦があって、(竿燈を支える箇所が)流し、平手、額、肩、腰とパート分けされているんですけど、それを全部1人でやるのが個人戦。6メートルの円があって、その中心にある印からいかに動かないか、というのを競うんです。個人戦では私、昨年度優勝させてもらいまして、今年はいったんお休みです。妙技会は、型の美しさを競うものですから、真剣勝負です。上げている時は、ほぼ無心で、ほぼ息もしていないです。息を止めるくらいでないと竿も止まらないっていう、うっすら呼吸しているようなかんじです。

夜竿燈では、毎年一番大事にしているのが、観客を湧かすことですね。やっぱり技がきれいに決まったときとか、竿を高く継いで、それをうまく捌いて、技が決まったときは、盛り上がります。それで拍手をいただくと、自分もそれにさらに応えたくなる。もう、それが一番ですね。祭りに出た人の特権かなって思います。それがあるから辞められなくなっちゃうし、辞めたいなって思ったこともない。というよりも、生活の一部のレベルなんですよね。好きも嫌いもなくて、食べる、寝る、とかの延長線で。「8月は竿燈なんだ」っていう生活リズムで、そこを深く考えたこともないです。

自分のモットーは「竿燈が正月」ですからね（笑）。竿燈が終わると年が明ける、みたいな感じで、そろそろ一年の締めくくりです。かえって、本番前の練習の時期が一番楽しいのかもしれないですね。竿燈漬けの1ヵ月ですから。お祭り自体はあっという間に終わってしまうんでね。

竿燈っていうのは、毎年の練習の積み重ねがあってこその祭りで、誰でもできるものじゃない。お神輿とか、山車とかとは違う、全国的にも珍しいものである、ということに、みんな自負を持ってやっています。自分の信念としては「どんな所でも提灯は揺らさない」。提灯を揺らさない演技を基本として、そのうえで、観客を湧かす。あくまでも提灯は、上から下まで揺らしたくないし、ロウソクの火を一本も消したくないんです。

みなさんに推薦していただいて、この町内の代表をさせてもらうことになって、今年からは、自分だけが楽しむお祭りではなくなりました。みんなが楽しめるお祭りにするために、一番はケガをさせないことなので、まずはそれを目指してやっています。年齢もさまざま、年配の方から、ちっちゃい子まで、今、うちの町内は100名いますけど、繋がりはほんとに大切ですね。周りのみなさんのバックアップなしではできないことで、常日頃、みなさんに感謝しています。

今年は天候が悪い日が多くて、練習期間が短かったんですが、そのぶん、集中して練習できていて、みんなすごく仕上がりが良いので、技の形の美しさを、ぜひ見てほしいですね。子どもたちも多いので、その楽しんでいる表情、お囃子も非常に頑張ってます。そんな我が町内全体を見ていただければな、と思います。

詩修

詩人が描く
池田修三の言葉

池田修三の版画に寄せた、
詩人たちの書き下ろし作品

9

高橋　優

「さくらんぼ」1974年

魅力の果実

ポケットにはまだ
あっただろうか
君を惹きつける
魅力の果実

このサクランボが
最後だろうか
君と寄り添える
口実の果実

僕のこの手に
何もなくなれば
君は瞬く間
居なくなるのかな

サクランボを見て笑ってる
君の笑顔に
僕も思わず
笑ってる

両手に何もなくなった
そのあとのことは分からない
今は寄り添える幸せを
魅力の果実と君の香りを
お願いだからあと少し

高橋 優　1983年秋田県横手市生まれ。シンガーソングライター。2010年「素晴らしき日常」でメジャーデビュー。2015年7月22日リリースのベストアルバム「笑う約束」はオリコンウィークリーチャート3位獲得。同月25日に秋田市で開催したリリース記念イベントでは5000人を動員し、秋田県知事より「あきた音楽大使」に任命された。

池田 修三　1922年秋田県にかほ市象潟町生まれ。版画家。秋田県内の高等学校美術科教諭を退職後、1955年に上京し版画に専念する。主テーマは子どもたちの情景で、晩年は風景画も手がける。作品は企業カレンダーや銀行の通帳、「広報きさかた」の表紙などにも使われる。2004年82歳で死去。

本番での貴志さんの演技は、圧巻の一言。日々、修練してきたこと、代表として担ってきたこと、すべてを、観客を魅了する演技に昇華させています。技や精神を受け継ぎながら、貴志さんのような存在を確かに生み出しているこの祭りに、秋田の希望の燈を見るようでした。

航空

東京(羽田)⇔秋田　ANA/JAL … 約65分
大阪(伊丹)⇔秋田　ANA/JAL … 約80分
札幌(新千歳)⇔秋田　ANA/JAL … 約55分
名古屋(中部国際)⇔秋田　ANA … 約80分
【リムジンバス】秋田空港～秋田駅西口(約35分)
東京(羽田)⇔大館能代　ANA … 約70分
【リムジンバス】大館能代空港～大館市内(約55分)
大館能代空港～北秋田市(鷹巣)(約15分)
〈ANA〉0570-029-222 〈JAL〉0570-025-071

藤本流 のんびり飛行機の旅

車で丸1日かけて秋田へ行くことも多い僕にとって、伊丹空港から秋田空港までたったの80分。って、まるでワープ。しかも早割の安い航空券使ったら、大阪～東京の新幹線代と変わらない安さ！ 関西から意外に行きやすいのです。

新日本海フェリー

北行　敦賀(10:00)⇨新潟(22:30)⇨
秋田(翌5:50)⇨苫小牧東(17:20)
南行　苫小牧東(19:30)⇨
秋田(翌7:45)⇨
新潟(15:30)⇨敦賀(翌5:30)

●秋田港から秋田市街へは車で約30分。
(秋田中央交通バスのご利用も可能)
〈秋田フェリーターミナル〉
018-880-2600
運航スケジュールは必ずお問合せください。

秋田新幹線 こまち

仙台⇔秋田
最速2時間5分
大宮⇔田沢湖
最速2時間21分
東京⇔秋田
最速3時間37分
〈JR東日本テレフォンセンター〉
050-2016-1600

鍵岡流 のんびり新幹線の旅

新幹線での行程の中で盛岡を過ぎたあたりから急激に速度が遅くなってきて風景が近くなってくるあたりがおもしろいです。それまでの高速移動から一転、新幹線なのに眼前に迫ってくる緑の距離と人家。自分の持っている新幹線の窓から見える風景の印象とのギャップが、何となく不思議な気持ちになりますし、何回か利用しているとこのタイミングで「秋田に向かっているのだな」とテンションが上がってきます。

高速バス

仙台⇔秋田　… 3時間35分(仙秋号)
東京⇔秋田　… 8時間30分(フローラ号)深夜バス
横浜⇔秋田　… 9時間40分(ドリーム秋田・横浜号)深夜バス
〈秋田中央交通(フローラ号・仙秋号)〉018-823-4890
〈JRバス東北秋田支店(ドリーム秋田・横浜号)〉018-862-9461
※秋田市以外の市町村を往復する便も複数あります。

自動車(高速道路利用)

仙台⇔秋田　… 約3時間30分
東京⇔秋田　… 約7時間30分
〈日本道路交通情報センター(秋田センター)〉
050-3369-6605

non-biri akita access map

三種町

じゅんさいの館(P57～)

じゅんさいの購入や摘み取り体験の情報を案内しています。

山本郡三種町森岳字東二ツ森97　TEL　0185-72-4355

【自動車】
秋田駅
|(10分)
秋田中央IC
|(25分)
琴丘森岳IC
|(10分)
じゅんさいの館

【電車】
秋田駅
|JR奥羽本線(50分)
森岳駅
|タクシー(10分)
じゅんさいの館

秋田市

秋田市民俗芸能伝承館(P51～)(ねぶり流し館)

秋田の民俗芸能についての展示や、竿燈の実演を見ることができます。
《秋田竿燈まつり》
毎年8月3・4・5・6日開催

秋田市大町1丁目3-30
TEL　018-866-7091

【自動車】
秋田駅
|(5分)
秋田市民俗芸能伝承館
(ねぶり流し館)

【バス】
秋田駅西口
バスターミナル
|(5分)
バス停「通町」
|(1分)
秋田市民俗芸能伝承館
(ねぶり流し館)

【徒歩】
秋田駅
|(20分)
秋田市民俗芸能伝承館
(ねぶり流し館)

秋田市立赤れんが郷土館 勝平得之記念館(P4～)

秋田市大町3丁目3-21　TEL　018-864-6851

【自動車】
秋田駅
|(5分)
秋田市立赤れんが郷土館
勝平得之記念館

【バス】
秋田駅西口
バスターミナル
|(5分)
バス停「交通公社前」
|(1分)
秋田市立赤れんが郷土館
勝平得之記念館

【徒歩】
秋田駅
|(20分)
秋田市立赤れんが郷土館
勝平得之記念館

池田修三展

2015年9月19日［土］—10月12日［月・祝］10:00〜18:00
［休館日］9月30日［水］—10月2日［金］
秋田県立美術館1F 県民ギャラリー（秋田市中通1丁目4–2）
入場無料

展覧会は終了いたしました。
たくさんのご来場ありがとうございました。

関連企画展
『勝平得之と池田修三』展 〜木版画にめざめる瞬間〜
2015年9月12日［土］—11月15日［日］ 9:30〜16:00 ／秋田市立赤れんが郷土館（勝平得之記念館）／観覧料 200円（高校生以下 無料）

あきた県民文化芸術祭 2015　2015年9月1日［火］—11月30日［月］ http://common3.pref.akita.lg.jp/bunka/

AKITA ART PROJECT あきたアートプロジェクト　文化庁
平成27年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業

Enquête and Present

『のんびり』をお読みいただきありがとうございました。アンケートにご協力ください。

『のんびり』は人を基軸に「あきたのほんとう」をまっすぐ伝えるマガジンです。本号へのご感想、今後とりあげてほしいテーマなどのご要望、ご提案を、ハガキか「のんびり公式ウェブサイト」のアンケートページからお寄せください。抽選で『のんびり』オリジナルプレゼントをお贈りいたします。応募〆切は2015年10月31日（土）。当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。
※個人情報はプレゼントをお届けするためだけに利用し、その目的以外の利用はいたしません。

プレゼントの応募は終了いたしました

PRESENT No.1

勝平得之作品集 版画 ［秋田の四季］
編集　勝平新一／発行　秋田文化出版株式会社

秋田の木版画家、勝平得之の作品集。美しく豊かな秋田の風土が描かれています。

PRESENT No.2

のんびり美術「秋田の偉人」木版絵葉書セット

特集内で編集部が制作した、秋田の偉人（石川理紀之助、成田為三、勝平得之）の木版絵葉書セット！

のんびり公式ウェブサイト　http://non-biri.net

ハガキでご応募の場合
❶ 郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレス
❷ 本誌の入手先　❸ 今後とりあげてほしい話題　❹ 今号でおもしろかった記事（複数回答可）
❺ ご感想　❻ 希望のプレゼント
以上をハガキに明記の上、ご応募ください。

宛先　〒010-0021 秋田市楢山登町7-14　のんびり合同会社 のんびり編集部

のんびり
14
2015.Autumn
2015年9月18日発行

のんびり公式ウェブサイト
http://non-biri.net

STAFF

編集長
藤本智士（Re:S）

編集
矢吹史子
田宮　慎
今井春佳
山口はるか（Re:S）

アートディレクション＆デザイン
堀口　努（underson）

デザイン
澁谷和之（澁谷デザイン事務所）

写真
浅田政志
鍵岡龍門
船橋陽馬
高橋　希（オジモンカメラ）

題字・イラストレーション
スダタカミツ

似顔絵
田渕志織

デザインアシスタント
小阪温視
古里凌哉

動画
近藤康洋（mel digital co,.ltd）
佐藤　努（mel digital co,.ltd）

大道具
大谷　心

発行
秋田県
観光文化スポーツ部観光戦略課あきたびじょん室
Phone：018-860-1073

編集
のんびり合同会社　のんびり編集部
〒 010-0021　秋田市楢山登町 7-14
Phone & Facsimile：018-832-8086
Mail：info@non-biri-go-do.jp

印刷・製本
秋田活版印刷株式会社

＊乱丁・落丁誌はお取り替えいたします。
＊本誌内容の無断転記、記載、複写はご遠慮ください。
＊本誌データは2015年8月17日現在の情報です。
あらかじめご了承ください。
＊本誌は「あきたびじょん」マガジン等企画制作業務委託業務で制作いたしました。

© nonbiri all rights reserved.